

川柳塔

昭和十七年七月二十一日創刊
昭和十七年七月二十一日發行（毎月一日發行）
創刊大正十三年 通卷六一九号



日川協加盟

No. 619

秀句抄・二賞候補作品

十二月号

不動産売買・仲介・管理

大阪府公認

豊津住宅

代表者 大矢喜一
取引主任者

〒561 大阪府吹田市泉町5丁目11-14
(阪急豊津駅より大道路を吹田方面へ10m右側)

電話 06 (388) 6102 番
(387) 8327

夜10時まで営業いたしております
夜間でもお電話受付ます

御案内

マンション・文化・アパート・店舗・他土地建物の事なら
お気軽に豊津住宅へお問い合わせ下さいませ(案内無料)

他営業御案内

豊津囲碁・将棋センター(碁将棋盤卸売3〜4割引)
社団法人耕心学堂国際貴金属取引協会純金売買取引店
大矢タバコ店・喫煙具その他(贈答品卸売大量発注に限る)
場所 豊津駅より大道路を吹田市民病院方面へ100m右側

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (64) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下店
南海難波駅構内店 虹のまち鹿鳴店 京阪デパート 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・布施店)

お香を聞く会

秋の空が高く暗れ上がった先月の三十日。三輪明神の聖域にある記念館で、めったに開かれぬと言われる豪華な「お香の会」に参初する機会に恵まれた。おはずかしい話だが、こうした厳肅な席に列するのは全く初めての経験で、頂く香炉が回って来ても、上席の方を見まねで形だけの香の聞きかたである。悲しいかな第一炉も第二炉も第三炉も一向に区別がつかず、折角の銘香も猫に小判よりもなげなく、もったいない限り。先輩のお話によれば、茶道も猫に同様に、香の薫りそのものを陶然として楽しむのが大事で、むずかしい作法は第二義である。機会があったらお作法を知らないとか、香の種類や銘香を知らないことを恥ずかしがって遠慮するなどしないで、進んで出席させてもらおうといふ言われる。丁度、われわれが、初心の時に句会に出席するのと相通するものがある様で、ほのぼのとした気分で胸ふくるる思いのときであった。

山の辺の道は遙かに朱の深さ

もつともらしい顔で銘香聞く正坐

銘香を蚊やり木等とは申すまじ

正倉院拝観

山水図千年のふぜいとユーモアと

来年はわたしの干支と妻の夢

中島生々庵

川柳塔十二月号

路郎先生のゆめ

戸田 古方

川柳社会は路郎先生の大きな夢でありま
す。いつもお話に聞いていました朝日会館の
大川柳大会は私が川柳に入る前のことで、詳
しくは存じませんが、来日したソ連の文豪エ
レンブルグと川柳を語られたり、自ら満蒙の
奥深く旅行されたりしました。また、没後、
蔵書や遺著が大阪市立図書館に寄贈されたこ
とも皆様ご存知のことでございます。大阪で
短詩文学連盟を結成され、その理事長であら
れたこと。終戦後、いち早く、衆議院議員選
挙に立候補されたのも、みな、そのご活動の
一端と拝せられます。

その頃から、大阪市文化祭の一つの催とし
て、市民川柳大会が持たれ始めました。その
下準備の打合せに、毎年私は川柳雑誌の代表
として出席致して居りました。その結果を路
郎先生のお宅へ報告に参上するのです。

廻が、それがコトなんです。この参上、私
にとつては、秋の台風より足がすくむのでし
た。

「こんな会をして何が市民川柳大会や、既
製川柳家の集りやないか、一人でも、市民

座右の句

生々流転昼寝する日もある暮らし

(生々庵)

私の句

嬉しい友 今日の子定が狂っても

増田 次章

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

お香を聞く会

中島生々庵 (1)

路郎先生のゆめ

戸田 古方 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二十二)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫 (26)

川柳塔 (同人作品)

西尾 菜選 (4)

水煙抄

正本 水客選 (36)

宗匠渡世の哀歎 (川柳太平記⑦)

東野 大八 (24)

秀句鑑賞

(同人吟)

伊藤 茶仏 (47)

(水煙抄)

小西 雄々 (51)

愛染帖

橋高薰風選 (48)

秀句抄・53年度二賞候補作品……………小出智子・河野君子・整理……………(28)

雅号ぶっちゃげばなし……………柊 みどり……………(35)

初歩教室……………本田恵二朗……………(54)

大萬川柳「ふれあい」……………川村好郎選……………(56)

柳界展望……………(庸佑・整理)……………(60)

本社十一月句会……………(庸佑・整理)……………(60)

各地柳壇(佳句地10選)……………斎藤三十四選……………(65)

「晦日そば」……………高橋夕花選……………(52)

一路集「集金」……………野田素身郎選……………(52)

「冬」……………山内静水選……………(53)

編集後記……………(一三夫・葉子)……………(71)

座右の句

進む時計遅れる時計夫婦かな

私の句

残り火の色気がさせる薄化粧

(蕉風)

伏見茂美

に川柳の醍醐味を味わわせるようなことを
どこでしてるんや。」

もつとも、今日の様に各柳社の自由な交流
の難しかった時代、せめて、そうした人達が
こたわりもなく一堂に会せるようになっただ
けでも大したお手柄だったのかもしれない。
それにしても、先生の仰しやることはよ
くわかるし、そんな川柳大会にしたいと思
いますが、さてとなると、それが、容易なこと
ではありませんでした。

それから三十年近くたちましたが、はたし
て、先生の夢が実現しているでしょうか。

先生は「人間陶冶の詩」と遺訓されま
した。又、「生命ある句を作れ」ともいつてお
られます。不朽洞会員だった各位は個性豊か
な一人一人に育たれました。生命ある限り
「生命ある句」への努力を重ねていられます
が、初心の市民にいきなりそれを要求される
先生ではありません。「川柳は人間を人間ら
しくしてくれる詩」「川柳を通して人々が少
しても不朽の幸せを身につけてほしい」、そ
れが先生の夢だったのでしよう。

生々庵氏によって、又、好郎氏に引き継が
れ、毎月老人達に川柳の楽しみを味わわせて
いられるラジオの番組など、一部では、先生
の夢がぼつぼつながら前進しています。今
一段の創意と工夫と努力が十分でない様な気
も致します。柳界の指導者の皆さんにおこが
ましくも一矢射させていただく次第です。



西尾 葉選

豊中市 安藤 寿美子

根っからの善人少しもて余し
月下美人一夜かぎりの主役なる
鬮雲のりこえられぬ癖がある
木犀の闇をしずかに去る女
おばはんの十五六人も居りぬべし
おたやんの面を外してから笑え

竹原市 小島 蘭 幸

金貸してしばらく続くゆううつよ
後手後手にまわり結構楽しそう
父を真ん中に土地買う話など
太陽よ月よ地球にある祈り
窓際の女に潮が満ちてくる
ライバルも俺も人間臭うなり

松原市 谷垣 史 好

小さめの乳房好もし秋のひとつ

米洗うリズムいつもの母でなし
残忍な心密柑を胴切りに

お菓子より甘く哀しい風ぐすり
素うどんとめしでニヒルな昼にする
せわしない一日だった茶器仕舞う

大阪市 川口 弘 生

糞虫の寝袋のまま潰される
お力になれず善人わびしい日
磨かれて玉は光るにはばからず
丑歳というのに弱い胃が一つ
ご先祖の妾の墓もあるお寺

富田林市 岩田 美 代

霊柩車動いて秋が澄み渡る
信じたい心に芒騒ぎ出す
冷静なつもりを嗤う忘れもの
手おくれの言葉を語尾に足して来る

本當を聞くと傷口深くなる

倉敷市 野田 素身郎

結果論にすぎぬ批判だ気にすまい

詩が命三十にしてまだ一人

長生きをしようと思えいつき

新課長只酒飲まぬのが自慢

アベックならずとも去り難し月の土堤

青森市 工藤 甲吉

にんまりと賄賂ご嘉納あらせられ

政治力とは裏回りばかりして

平凡な人生ですと清々し

貧しかりせばコマコマとチマチマと

十二月叱られてゐる仏性

川西市 戸田 古方

何か書いたあるバッグの文字は読みとつて

おめでたのかえりですよと寄つてくれ

髭をはやしてあんたは何を得したの

柄にもないと思いつつ幸福論

ジーパンの裾切らし指環にネックレス

倉敷市 水粉 千翁

茶に坐る虫の跽音聞くように

その時は堰を切らねばならぬ水

ことさらに友とは云わぬ友ばかり

あこがれの明日の彩あり夕日燃ゆ

ふところを故郷の風が抜けてくれ

堺市 河内 天笑

そんなこともあったあつたという自白

肚の虫治まる頃は酔いつぶれ

ほつといてくれたら丸くいったこと

虫すかん同士であくびかみ殺し

そこそこにお通夜すまして逢いに行き

大阪市 金井 文秋

自分の為に生きる女は振向かぬ

美を意識している鼻がなじめない

顕示欲まだ満足の出来ぬ地位

食卓にも若さが消えた老夫婦

ほめる氣を自慢をされたのでやめる

東大阪市 市場 没食子

諸慾散華どころか法主生ぐさい

名を捨てて実とる破目で主役降り

核家族した子を余生まだかまい

皆既月蝕宇宙のショウが今開く

円高の恩恵徴々で市場籠

尼崎市 黒川 紫香

気楽でんなとひとりぼっちを羨まれ

草の種つけて近道から戻り

入歯から高野豆腐の汁が洩れ

マウイ島

高見山転んだ日に来たマウイ島

野次馬になり乗ってみるキビ列車

高槻市 若柳潮花

猿がするとうりに人の子が真似る

マニキュアの爪が眼にたつ通夜のお茶

女にはいまだに執行猶予中

SFの漫画と留守を寝ころがり

ぎんなんも恋も浪速の雨に濡れ

桜井市 岩本雀踊子

定年後の目覚時計は進ませぬ

年金の暮らし墓地の値にふれる

十指からこぼれる窓にフト気付き

こぼれ萩しじまを蟻の冬仕度

許すとは云わぬが父に許される

大阪市 本多柳志

折り込みはすぐ建つ夢をそそのかせ

史書にまだ浪速に地震ない安堵

書ける手も書くのが怒い遺言書

長生きを保険会社に励まされ

旅中吟

雨の山下れば裾野天高し

島根県 藤井明朗

口癖の多忙 仕事を追うて足る

統計調査お茶の中から聞いて済み

パンダの話題もいつしか秋暮れる

不機嫌な箸母の目はだまされず

親から子へ流れのよどむのに慌て

竹原市 山内静水

古谷節夫川柳塔受賞

太刀持でよし愛弟子の土俵入り

口あけて寝てる家内を裏切れず

奥さんがおしめほして同い歳

離せないラッパ宿業とも思う

別れたら人は他人と言いなさる

和歌山市 野村太茂津

ドラマ脚色太宰府の飛梅に

秋陽落つ元の野望を取り戻す

木石でなしさざ波ほどにゆらぎ出す

里訛りおけさは土の香で唄う

迷惑を知らない弟子のはしやぎよう

八尾市 香川酔々

毀誉褒貶どれでもよろし金の欲

風を見た男に詩神会イニクいに来る

おみくじは凶 神様の悪い洒落

それは小さな地蔵で女手合わす

原稿紙ニュースソースは守ります

八尾市 高橋夕花

テーブルのりんごも梨も横を向く

母逝つてやっぱり切れぬ夜の爪

すこしずつ譲って友情温める

人形展の一つ心を抱きにくる

言い勝って益々つものる自己嫌悪

島根県 堀江正朗

じいちゃんと呼ぶ顔見たし抱き上げて
妻の手の触れる座にいて勇氣湧く
いいようにとは年寄りに物足らぬ
一日のでこぼこ酒が消してくれ
裏の裏 裏は教えぬ妻でよし

藤井寺市 児島 与呂志

内緒での話二時間だけはもち
沈黙でごまかす暮しまだ知らず
家中の音が聞える道曲り
大阪の足勤めて来た誇り
さわやかに老いる努力を語り合う

大阪市 中川 滋 雀

彼岸会の鳩も浄土の鐘を聞く
徳ひとりじめには出来ぬザルの穴
神無月祝いの金が今日も出る
もの想う夜長に煙草が切れました
完成予想図見事な嘘で釣りにくる

大阪市 小出 智 子

河野君子さんへ
姑となるひとの笑顔が美しい
言いたいこと言える鏡がひとつある
爪の痛みは言わないでおく栗御飯
女に小さな企みがある菊日和
山に来て他人と水を分けて飲む

倉敷市 田垣 方 大

新妻は仕事の虫が気に入らな
さんづけにされて課長は身構える
音のない騒音どぎつい絵看板
人体は分解掃除せずに古稀
十二月独身貴族はまだ起きず

鳥取市 河村 日 満

息子親娘交通禍
泣き声はわが孫奥歯噛みしめる
生き抜けと祈るころの眼を閉じる
お見舞いへ死んでいてもを繰り返えし
ホッと怪我のこともへ愚痴叱言
交通禍みなよそ事とおもいに

兵庫県 遠山 可 住

残飯で捨てられるなよ米出荷
土を離れて人間涸れて来る
だから金が要る自信ゆらぐ時
ひたひたと秋はひとりでやって来ず
世界平和を叫び隣りと折り合えず

倉吉市 奥谷 弘 朗

県展を妻と見に行く秋日和
誘致した工場公害だけ広げ
甦がえる修羅へ再起を励まされ
借金は恥で育った大正っ子
近頃はロマンもスリルも無くて老い

岡山県 嘉数 千代香

とどまれば倒れる独楽の性に似て
妥協する音で積木が崩される
突き放した親が見護る距離にいる
云い合えば哀し黙せばなお哀し
無切符で恍惚列車に乗りました

八尾市 大路 美 幸

祝福の拍手を少し妬いて打つ
一時間で必ず解決するドラマ
こめかみの青さに誰も逆らえぬ
エリートもいつかは椅子に拒まれる
ふるさとの石のぬくみに触れて冬

大阪市 神 谷 凡九郎

そこまで行けばそれなりに意義がある
〃神様でない人間〃そこからの出発
素晴しき人生かも地下道に眠てる
〃自分が可愛い〃そこからの矛盾
〃それだけの人よ〃と俺を評価に夜が来る

今治市 月 原 宵 明

そろばんで確かめられる電算器
弔電を打たせてゴルフ場へ行き
悔恨の肩ゆっくりと濡れてゆく
コスモスの抵抗せめて匍うて咲く
秋へポツンと青磁の壺のもの想い

鳥取市 両 川 洋 々
再起への十字架ならば妻と負う

つまずいて初心にかえる座禅組む
胸の中に俺も火山を一つ抱く
枯れ枝と知らず尺取虫挑む
死火山の妻が火を噴く夜を恐れ

八尾市 高 杉 鬼 遊

セレナードならば弾けます老夫婦
金木犀せめて花散るまでの贅
ゴキブリを見逃がすだけの愛はない
生国は何処の卑弥呼ぞ六本木
つり革に燃える義もなし恋もなし

信濃路の旅に 京都市 松 川 杜 的

曼珠沙華木曾路を早い秋にする
タブレットの廻る余韻へ通過線
乗り飽いた車窓は雲と対話して
絵島の墓にて
秋雨へひときわ供養の赤が冴え

高遠の町にて

桜の無い高遠でよし道祖神

松江市 恒 松 町 紅

もういらぬ雨が一日降りつづき
建築場冷たい秋の雨に濡れ
我が子だけ写し運動会終る
説教のあとは本山寄進帳
名利も周遊券に汚される

八尾市 宮西弥生

今日閉じる日記に恥じる善がない

ひとり者同士で夕食スカイビル

恋人が坐るとまわる花時計

秋の空うっかりだまし討ちに会う

寶石に都会の夜は見せられず

鳥取県 川崎秋女

いたわりを間違えるほど情に飢え

振り向けば妻そこにいる幸よ

オルゴールの正直同じうた唄う

嘘八百ならべて出口のないあせり

一つだけ私も持ちたい玉手箱

堺市 高橋千万子

花手桶来年約束出来ぬとし

結論を急げ秋の陽が沈む

出口には恩給があり耐える職

敗者哀し妥協の理由口にせず

文化とは思案も出来ぬ自動ドア

和歌山市 西山幸

温もりを連れ去って行く言葉尻

見抜いてる嘘を黙って聞いておく

履歴書に円満退社と書いてある

窓の灯へ邪推ばかりが寄ってくる

足音のひとつがいつも耳底に

竹原市 森井菁居

皆までを言えぬ男の自負がある

大安も朝から走る救急車

四面楚歌月の丸さが救いなり

過信は禁物などと意気地のない男

手の内は目無しダルマが知っている

西宮市 若林草右

電子レンジ炭火の鮎の味知らず

駐車禁止 奥に小さく地蔵尊

招待は朝粥という敬老日

記者会見パンダの尿の講義きく

日蝕へ蠟燭お役に立ったぞよ

鳥取県 鈴木村颯子

十三時ちうても時計腑におちず

東京に昔三人 出た一人

洋間 日本間 住まうは二重人格者

転んでも押ピンほどの意地はもち

人生の余白追伸書くところ

和歌山市 松原寿子

逢うための切符へ揺れている鼓動

ペンシルの芯は脇道など知らぬ

引き潮のむこうで貴方を一人じめ

熱い瞳に通じる言葉だつてある

美しい秘密が炎えてゆく日記

沈黙の続く病室百合匂う
大阪市 津守柳信

頬ずりを待つ死顔は仏なる
ヒモ切れしタコも浮上をこころみる
思い出にひたる涙は一人きり
燈明に案内されている旅路

愛媛県 渡辺 曉 童

大きな隙を みせる世渡り

鯨も鮭も 馬鹿にした罰

時間給水 月は天心

落ちつくところは 素うどんの味

良い死に方と ほめられるふぐ

大阪市 江城 修 史

子に賭ける夢よ夫婦に坂幾つ

大安の街に哀歎交差する

負け犬にまだ友の居るありがたき

再会の嘘聞く茶房の外は雨

身構える暮しの中の生きる詩

和歌山市 若宮 武 雄

俺に似ぬ子だからうまく生きるなら

切れている運命線を生きる汗

赤信号無視 ある日の生きる道

甲斐性を膳に盛られている苦笑

生け花にしたし自由に咲かせたし

高槻市 辻 白 溪 子

トレパンで走って朝の顔馴染み

愚痴多いマダムとポトル知っており

総立ちのなかをアンカーに引き継がれ
ふるさとの名残りを残して土手曲る
出勤の背中へもいちど念を押し

寝屋川市 江口 度

鬼子母神ざくろの味でがまんする

コスモスよお前も孤独好きなのか

ピストルぶらさげてゆく運動会

ぐっすりと寝てる身勝手だなと思う

一日たったら明日が来るこわさ

富田林市 板尾 岳 人

高野豆腐好き男になりました

母ばかり疲れて父は山にあり

石投げることも教える母の指

十二月三十一日山へ行く

晒首少し疲れて山へゆく

大阪市 大坂 形 水

インフレの紙幣ペラペラになってゆく

解き捨てた帯がトグロを巻いている

我慢強く敵の自滅を待っている

何を思っって夫トイレを掃除する

洗っても指に残っている匂い

大阪市 不二田 一三夫

高橋操子さん句集刊行(二句)

めでたさも亀万年の〃千亀利〃かな

自家用車ないから歩道橋歩く

鶏はひと口ずつ　なに考える

秋田実先生の一周忌法要（贈物で立てず）

一時間だけ立てる注射で墓詣り

（思い出）

みそかそば師弟の味も家族亭

島根県　堀江芳子

スケジュールの中に心電図が潜む

縋るものあって両の手温かい

カー磨く青春光るごと磨く

水鳥のみな寄り添うて湖ぬくし

今治市　長野文庫

なる程と思わずコマージュの嘘

みな半端金はかけないコレクシオン

不承々々三角形の握手する

さり気ない会話自慢をちらつかせ

新宮市　大矢十郎

平均寿命益軒訓に異議があり

乾杯の音頭は勲章持ちへ行く

義理で来て眠い拍手のプログラム

思春期に良からぬ本で歯科を待つ

藤井寺市　西　いわを

雷鳥が迎える山の初冠雪

殺さぬと見抜きましたたきせぬ蛙

選り分けて啄んでいる鳩の群

地藏眉の顔には惜しい毀損仏

鳥取市　小林由多香

きっかけがつかめず再起空ら回り
出稼ぎの俺にはまるい月があり
あわて者だから笑ってすまされる

梨娘鳥取県を売る美声

大阪市　山川阿茶

頭の体操呆けてはならぬ一人ぼち
自分自身情緒の歪みに気がつかず
鏡見て思うタイムトンネルの恐わさ

香水をかえて陶醉してる秋

米子市　林瑞枝

三代の哀歎平和に時計鳴る

友情はいいもの背中で物が言え

ニューヨークからの便りへ英辞典

ぜいたくの買える時代で銭に飢え

米子市　石垣花子

御真影掲げ異国の土に生き

嫁ぐ娘へ祖母も広げる裁縫台

有余っても祖母は落穂を拾わせる

朽るまで明治夫に牛耳られ

出雲市　原　独仙

見積ってみても新築他人のもの

鬼瓦威張るな俺は土台石

お見舞に行けば元氣と比較され

重役になっても寝たばこ盗み酒

松江市 柳 楽 鶴 丸

植物人間つくって医学の進歩です
歌手がうたうと民謡の土の香が消える
国引のように島へ橋をかけ
履歴書へかけぬ尊い体験談

松江市 小林 孤呂二

惜しまれる人で功すら語らない
使い古しにされて秋の叙歎くる
地に遷すのに戒名まで貰い
湯豆腐を食うドラマも雪になる

西宮市 島 居 百 酒

根が善人入れ知恵通り振舞えず
新生児なにを夢見る初笑い
追憶の最初に浮かんでくる笑顔
宿願があつて善人貌となる

柳井市 弘 津 柳 慶

老年をちゃらんぼらんで過し去り
末席から来てクドクドと酒を注ぎ
祖母が居るので仏滅の大安の
ライオンにも熊にもなつて秋の雲

高槻市 福 田 丁 路

暁の露もろともに草を刈る
秋のなか鎌も心も研ぎ澄し
マイカーの無いのを不思議そうに云い
道を聞く言葉を知らぬハイキング

唐津市 新 岡 回 天 子

ホー寒むいポートは皆はい上り
国鉄が出来辻の仏はどこへいた
金盃に入れば式級も特級なみ
水道が出ぬ間に秋ばれまだ続き

美弥市 安 平 次 弘 道

慶弔を問わぬ白菊売り切れる
ジャンケンポングーは憎悪を握らない
仕合せな日々運勢を気にしない
四季の花咲かせローカル線は暇

宝塚市 傍 島 静 馬

来る春はよもやの曾孫見られそう
お札など滅相もない顔で受け
あてつけに聞える姑のお念仏
じれつたい男に香水変えてみる

下関市 国 弘 半 休 門

霧が峰ピーナツラインで稼ぐ秋
善光寺権大僧正は護衛つき
車庫にしちやア奇麗だ屋台会館よ
歩行者天国日本橋で撮り

西宮市 藤 村 め 女

この女の色気を包む京袖
ヘソクリの出来ない母で楽天家
さりげなく手紙にませる母の嘘
信じてた愛のレールのきしむ音

松原市 玉置 重人

定年の挨拶靴を光らせる
定年になってラッシュがなつかしく

定年へ夜警に來いと求人欄

定年譜ここで止まった走馬燈

羽曳野市 塩満 敏

桜島おこれ不正がある限り

ウラシマの心がわかる里帰り

両替えの一万円札に移り香も

血圧によくない歩道橋わたる

米子市 小西 雄々

縁談はすすまず恋もはかどらず

税務署も借金取りも妻まかせ

サラ金に縁ない暮しを良しとする

頬寄せたこともあろうに倦怠期

島根県 小砂 白汀

花芽とは知らずバツサリ斬り落とし

少々哲学者めいてきましたひとり旅

渦潮に巻かれて見たい色がある

隣りから見れば吾が家は南なり

島根県 梶 みどり

ひとりばち心のささえ般若経

さからわず素直にそまる年のこう

晴れ姿何処かで亡夫の聲がする

十五夜の光冷たい庭にたつ

島根県 榎原 秀子

赤とんぼふっと見付けた小さい秋
捨石となる石臼が庭に生き

くつわ虫毎夜きかせる過疎の幸

クリーニング屋の失敗口でだけ許し

島根県 大森 孝華

愛着のもみじはゆれて三回忌

むかい風よけて笑顔に明日を置く

ピーポーへ善人だった立ち話

ふる里の変る姿に過去が住み

大阪市 西川 誓二

遅れとつても亀の気概は失わず

戯言と云われたくなし老いの詩

手をかえてセールス外濠埋めに來る

ささやかな反抗松茸など食うものか

京都市 都倉 求芽

まだ青いみかんが秋を忙わてさせ

タレントのサインの他はこんな文字

大原女もファッションショップへ立ち止まる

クイズ番組でも子供に負けはじめ

岡山市 川端 柳子

神さまに小さいねがいと皆おもう

泣けるだけ泣いて笑顔をすてません

窓平和太陽が過ぎ月が過ぎ

赤トンボ大きく秋へ抜き手切る

岡山県 出原 敬一

押せば退く不況同士にある掛値
隠し金バレた波紋の中で寝る
彼岸花娘と同窓の不幸聞く
菊凛と女が生きる庭に咲く

伊丹市 檜谷 寿馬

放言の嫁を迎えてやる放言
似た顔へあきらめて追う遍路笠
泣くことを知って世間が澄んで見え
敗北へ追い討ちかけてくる斜陽

東大阪市 斎藤 三十四

定年後また制服の保安員
飲んでなおるストレスなら酔おう
日曜のカンバス飛鳥路秋にする
菊作り神経痛を忘れさせ

笠岡市 松本 忠三

お裾分け家族の数をよんでおり
かゆいところ女房邪険に爪をたて
助手席の女へ余計な気をまわし
女房の意見野党に加勢する

東京都 山根 白星

朝刊へ牛乳の子の年が上
子の眼にも母の派手さが父に過ぎ
旅情など愚か新幹線の揺れ
女子寮の騒ぎ寝相を素っぱぬく

和歌山市 津田 与史

淡彩の味がわかって来た夫婦
田舎バス嫌々走って来て止り
平凡な粹にはまってまだ不服
物差しで計ったように年が暮れ

大阪市 西出 一栄

鶏頭のこぼれる秋の陽をとらえ
真夜中にちちろ鳴き止みしばし寂
胸灼くるワインを干して夜長かな
老いぬれば人なつかしき鬮雲

平田市 久家 代仕男

梯子から庭師の声が冴えて秋
秋空へ幻想はてしなくひろがり
曼珠沙華燃えて節操など忘れ
失恋へ雨は追い打ちかけるごと

大阪市 天正 千梢

分水嶺登った通りにおりられず
半世紀本物の夫婦になりきれず
長所見て手本短所も又手本
誤解の原因シッポふりすぎる

泉大津市 村上 春巳

どしゃ降りへ午後は晴れますカーラジオ
鐘の音の余韻に雨の大山寺
もうすぐに吹雪く砂丘は身構える
どんぐりを拾うて旅を旅らしく

宝塚市 小島無聖
きりりつと締めたネクタイ持つ自信

紅葉映え秋妖しくも三千院

おこされて皆月食を見るつらさ

善悪をとわずに刺さる栗のいが

神戸市 仲 どんたく

入れ換える電池が定年見当らず

ホステスのキャリヤに羊の皮剥がれ

秋・タンゴ踊る・昔取った杵柄

友の訃へ捧げる夜とす虫の声

大和郡山市 森 田 カズエ

ファッションを見る日ヤングの目の素直

付け焼刃そんなスベアの無い男

四苦八苦してるとみえぬ応接間

ひげつけて啼いても山羊の可愛らし

大阪市 河 井 庸 佑

算盤を度外視させる義理があり

完走のピリへ拍手を忘れない

面接で裏の裏まで見透かされ

踏み台にされてもじっと耐える意地

竹原市 時 広 一 路

島の灯がしぶきの中に揺れている

追憶の画布はロマンの彩で塗る

思い出を繋ぎ合せて酒を酌み

海が哭く風の力を借りて哭く

岸和田市 福 浦 勝 晴
松茸も食はず仕舞いで秋が逝く

レモンスカッシュの香りが孤独の眼にしみる

愛撫し合ってるように相撲のスローモーション

銀めしの沽券が下がる米離れ

倉敷市 藤 井 春 日

真実を知らずに忍びぬ聴診器

定退がそこに待ってる朝の靴

華やかな過去捨て嘘の無い暮し

それとなく欺まされてやる母の愛

姫路市 植 村 客 遊 子

木枯しへ肩寄せ合うて並木路

真面目さを買われしんどの役をもち

本気ならどうよと女くだをまく

真心のあふれるしぐさみそめられ

水見市 関 美 子

殺し合う人肉欲しいのでもなく

子等に言う小さな嘘も師走風

赤い爪むかし桑の実摘んだ指

よみがえる愛などありや冬の虹

仙台市 川 村 映 輝

人間のエゴ「むつ」をさまよわせ

倅せは菊に輪台掛けるとき

日本に余って居るのは人と米

聞かぬのにわしは陛下と同じ齢

和泉市 西岡洛醉

能面に成って才女のさからわず
鼓膜限界耳鳴りの峰昇る
雲の無い旅・立山は静か過ぎ
石仏黙して風の試練受け

倉敷市 小幡里風

くしゃくしゃに顔を崩して孫ほめる
不本意に膝を崩した座りダコ
音痴でもいつい口笛となるムード
秋晴れへハゼ人間を楽しませ

寝屋川市 宮尾 あいき

兼六公園

樹齢百五十さすがに松も杖をつき

越前海岸

呼鳥門しばらく鳥になっている

山代温泉

郷愁を湯の花太鼓が吹つとばす
友みんな留守で淋しい萩の道

宇部市 平田実男

お隣りの植音妻をいらだたせ
頑固さが取れてそれから只の人
花嫁へうっかり馬子にもと言いかかり
二人三脚他人同士の方が勝ち

呉市 榎田英詩

愚痴を言う妻の低音ずしり効く

子に残すものなし定年あとがない
二人だけの秘密洩らした夜の阿責
いい嫁に姑の自由が縛られる

和歌山市 小川佐知子

真盛りになぜか淋しき萩の寺
赤とんぼ古都の暮色を彩れる
裏切りを気付かぬふりで聞いている
胸深く住んで私に遠い人

呉市 林野甍光

タクシーは故郷へ走る秋祭り
職安の紙切れ握っている怒り
コネ作る先輩と言う利用価値
セリ終えた市場は風が吹き抜ける

守口市 野呂右近

竹中肖二氏を偲び

なまじっか残したテープの声に泣き
孫の顔覗いて取れた胃の支え
嫁姑左手使う子でも採め
自問自答して老の足渉らず

米子市 増田竹馬

まるく居て世間は広い住み心地
白星が続き不精ヒゲ伸びる
ジグザクに生きて人間の巾広げ
農政にかかわりもなく稲の出来

大田市 藤田軒太楼

根廻しを確かめ我が道突っ走る
野暮用と示し合せた愛人が居り
宿敵に死なれてみれば日々疎し
子には子の意見合槌だけはうち

兵庫県 河原みのる

明治さえ田ノ圃はいらん気のこわさ
つづれ刺せ着捨ての世とも知らで鳴く
拾うことおもしろし自作の粟でさえ
正体の蛇身に巻かれる恋がほし

松江市 中川晃男

門口を出ると男は胸を張り
裏切った相手を哀れと思う齡
十三日金曜日ひとりぼっちの宿直
仲好しになると外孫去んじまい

和歌山市 内芝としよ

責任感強い男の孤独の日
人形も四季折々のべべ欲しい
音痴でも母のナツメロ楽しそう
変化球投げて夫婦は仲直り

諫早市 原田明春

離婚の決意を家裁の椅子がにぶらせる
大物は顔を出さずに糸を引き
豊作へまた百姓が泣く米価
披露宴花嫁何度も化けて出る

枚方市 宮川珠笑

カラオケへ老眼鏡で歌詞を追う
恋人の頃から続く待たせぐせ
家にいることが不思議な二日酔
灰皿の嵩が会議のもめ具合

玉野市 小谷仙山

厳しくも暖かくもあり故郷の風
あきらめるより仕方が無いよ時世なら
さもあろう番茶はあつい内に飲む
先の先読んで苦勞が抜けきれず

岡山県 白岩文衛

(弔千原勝子君)
うつくしいひと美しい句を残し

インドネシア紀行

つたかずら吹くは昔のままの風(カタパン一句)

歓迎のことは厳しきことに触れ

新しい芽を吹くバナナに教えられ

大阪市 黒田真砂

自己嫌悪ちらと鏡にのぞかれる

傷ついた心を被う画布真白

酔いも甘いも経験して来た大あくぐら

秘密持って夜の鏡をそっと閉じ

大阪市 藤田頂留子

鞆当てをしたか接触事故の跡
ためらう色さらになく蜘蛛脱皮

一枚のピラで値上げになりました

テレビドラマ殺人法を教えます

鳥取市 佐々木 静 泉

よう腹のへる胃袋も父に似る

原点へ還るで結論らしくなる

秋風にうろろうる蟻は笑えない

電話する娘の声弾み過ぎてている（娘、結婚式近づく）

東大阪市 落 合 思 月

ため息は歩道へすてよう明日がある

水中花二人のささやき聞いている

二人の世界二人できたいで湯

血の絆たち切る刃見あたらす

鳥取市 大塚 豊 生

口下手のそれから先は妻が言う

恋捨てて心の窓を広うする

恩人もいつかは敵に回す人

叱らねばならぬ正面に向き直り

鳥取県 林 露 杖

寝ころべは土の香ぬくしこぼれ萩

借りるだけ借りて新居の青だたみ

玉石の丸き浮沈を語らない

年収は百万 車は二百万

大阪市 横 地 雅 風

もみじ下私も染まりそんな旅

ネックレス智能に関係ない児

弁当は紛れた蟻よ帰れるか

お見事な非常口です公費です

大阪市 太田 良子

ホームドラマ 我家と比較して見てる

クラス会たんび物故者増すも歳

老眼鏡要らぬ自慢を医者へ来て

合槌をうっかり打った長電話

今治市 越 智 一 水

じゃあねと言って娘は嫁に行き

あの時に黙っておって不倅

退職へこん度は家で邪魔がられ

わが妻をおんなと思う洗い髪

和歌山市 垂 井 千寿子

溜め息を集めマネキン着せられる

じれったい恋 砂に喋べらせる

捨てようと思う人形が笑い出し

左遷地での人情を知らされる

和歌山市 吉 野 富子

ドル暗記胸昂ぶらし待つ旅行

友情をうたがうような寡婦の言

老大工自信崩れてゆく悟り

私書箱で愛の証が泣いている

姫路市 大原 葉 香

還暦を迎え羅針儀狂い出し

マンションに住みつき故郷ない暮し

五十路の人間格差くつきりと

街角を曲がれば海の匂う道

貝塚市

行 天 千 代

気に入った服はマネキン脱がされる

此の齡でまだ新しい帯を買う

秋深くとなりも秋刀魚のけむり立て

彼岸花咲けば地球も冷えて来る

大阪市

本 間 満 津 子

馴れた友ダンスのリードに似る手引き

低い山だけど私のケルン積む

香水をエプロンに吹く淋しい日

旧友と少女のまままで巡り合い

大阪市

神 夏 磯 道 子

萩寺に萩まだ固し十三夜

噂の火私も野次になっている

戒律の寺も紅葉まっ盛り

合理化に汗の尊さ忘れかけ

奈良県

松 田 宇 宙 太

歯車のひとつが狂う離婚劇

引き金を足で引かせる敗戦記

切っ先をかわすしぐさでマツチ擦る

本物と贋のいのちを持つ蜥蜴

寝屋川市

柴 田 恵 美 子

会者定離今日はコーヒー二つ知り

倒産を救って会長辞任する

才媛の順に抜けてくクラス会

童画展いつかストレスはぐれてる

桜井市

河 合 茂 雄

頂上に立って枯葉の舞を見る

銃口を向けると小鳥も唾になり

調停は男無能に見てくれず

息つめて計れば長い長い秒

大阪市

北 勝 美

南柳さん悼む

倅せを全うされて往く彼岸

波を打つそよ風そこから萩の寺

君が代へ涙腺ゆるむ旗の音

静けさは萩へ集る蜂の音

大阪市

柳 原 静 香

聴えないことも一つの武器として

耳失うて真正直な眼となりぬ

六十のこれからと言う折り返し

大根葉戦さを知らぬ娘を叱り

松原市

北 野 久 子

虚しさは障害二級に耐えて生き

運動会音のないのは私だけ

同居してじいちゃん好みが派手になり

無縁墓地心やすらぐ年になり

兵庫県

北 山 越 山

有事論そろそろ火つけしそうなり

尺取りに歩巾が異う節があり

披露宴してやられたという祝詞
朝霧が晴れて丹波の昼を焚く

鳥取県 福田 保子

同情の中で風化をする持論
信念の道人脈に揺ぶられ

蟻の列一匹あわて者らしい

桐箱の中で陽の目をみる期待

島根県 飯塚 虎秋

ちっぼけな秋が住んでる水溜り
あの時は一枚だった舌にもえ

屋島から見れば瀬戸内水溜り

宿の下駄みんな浮気の虫に見え

倉敷市 藤原 桜山

ニアミスの大空描ききれぬ悔い
赤い羽根福祉国家へ胸を張り

倒木の土となる日をまかせきり

戦争を知らぬ世代の軍歌熱

西宮市 杉浦 婦美子

信じてもゆれる日もある夫婦橋
栗おこわ上手な母で出不精で

消しゴムで消えない今日が暮れてゆく

打てばびびく心に皺ができました

岡山県 直原 七面山

蛾にも蝶にもなる女
快心の出来へ名人黙し切り

今日もまた独り芝居の幕が開き

大阪市 神田 秀峰

証拠にはならぬしゃべりの水掛論

こん畜生あんな美人を妻にする

創作も混って歴史伝えられ

倉敷市 稲田 豊作

女房が米櫃覗くと夜が明ける
笑いぐずれ若い夫婦に苦勞がない

数珠を繰る指から罪障薄れゆく

姫路市 梅谿庵 不酔

湯上がりに男嫌いが薄化粧
笑顔する朝餉にうっかり吐くまいぞ

電算器中折話をどうはじく

大阪市 室谷 徹舟

保津川に二五〇〇円の水しぶき
上げたらと思う時に棹上げず

業知らぬ女で話が進まない

榎原市 岩井 本蔭棒

ここへ駅引いて広場の像にされ
首切りで築く繁栄ならいらぬ

紙切りの鉄矚しに乗っている

鳥取県 清水 一保

一升と云う名で日本酒の酔い心地
黄金の穂波に農政ゆれて見え
物価不況は休戦させて総裁戦

村祭り

花貰う度にたいこの威勢よし

二女初産に男子出生

五年目の初産男子おどり出る

日本男子ここにも一人生れたり

兵庫県 大江秋月

東大阪市 竹中綾女

(コマ劇場)

当分は橋の笑顔がチラチラす

叱る夫居らず暢気に送る日々

ちゃらんぼらんの先生でも先生

岡山市 時末一灯

夕日背に一歩確かに老いてゆく

現実の輪に立ちもどる二日酔

夫婦いて話すことない茶柱よ

松山市 谷のぶお

少年の椎の実置いた石地藏

愛さらり朝の味噌汁ほめて食べ

叱ってくれない他人様ばかり

七尾市 松高秀峰

蔭口を言えば本人顔を出し

孫婦省帰った電話でほっとする

誘惑に負けずネオンの灯を眺め

鳥取県 金川満春

商魂に徹した学歴意識せず

子供等に無口の父が頼母しく
追憶も遠く出征の日のホーム

京都市 山本規不風

油断して骨の脆ろさを知らされる

恍惚へ楽しい旅を彫っておこう

異だなと思う話へ聞き上手

島根県 大田亀甲

なつかしさ市電次から次と消え

白木権箒目もよし寺の庭

天皇とおない年とは毎度聞き

出雲市 高橋可保留

霧困気は和服が酌いで座が和み

(隠岐島)

島の娘の未練残して船の吾

転勤は島で恩師に迎えられ

大東市 土岐トク子

役に立つ姑で居たい日の流れ

一日中忙しい母で楽しそう

義理だけが素通りして居る年の暮れ

東大阪市 崎山美子

逃亡のやつれを知らぬモニタージュ

夕方になれば血圧など忘れ

週刊誌スターの別居で良くかせぎ

島根県 西村早苗

先きを読む男へナイフ研いでおく

ひそやかな夢一つ捨て二つ捨て
浮き雲をつないでひとりの思索

岸和田市 清野こう

神楽ばやし町に流れて秋日和
嬉し気に寄りそって見る子の背丈
寝過した嫁にかしわ手小さく打ち

倉敷市 斎藤通風

眠りから覚めて鈍行なお停車
大洋へ虚構の星は散りたるか
条件が良すぎて腹を据えて行く

鳥取市 岸本無人

逃げるからゲームの気持ちで追いかける
心配はしてましたと第三者
松茸の釣銭大根値切ってる

鳥取市 有田とし江

針衣着て身を守る栗の艶
糸通す子が傍にいて夜を縫う
うろこ雲広がる空よ子の別れ

熊野市 坪田冬花

口裏を合して友に助けられ
片言が待ってる我が家の灯に急ぎ
上役の目を親友に教えられ

岸和田市 島崎富志子

まずくとも作句を楽しみ自己陶醉
久々に逢うたに受験の子の話
鈴虫がかごの中からタクト振る

若本多久志

使い方知らない人が金を貯め
妻と子とローンで人生無に終り
赤トンボ今年は秋が短いよ
禁酒した身の乾杯はなめておき
菊薫る頃に死にたい夢も持ち

川村好郎

あきらめてしまえば淋しい酒になり
老いらくの恋のもろさに賭けてみる
頂いた命風邪ぐらい乱れまい
人間の弱さ手の鳴る方へ向く
ご主人はと聞けば無口になる女

尼緑之助

起重機も一と息入れる邪魔な奴
月が出て別れのせりふ盗まれる
皿に載る豚トラックにやかましき
右左見て出る釘打ちたがる
動物の歴史べールをはずさない

正本水客

ハワイ島

日付変更線 雲が流れて雲が湧く
歓迎のレイいちにち蘭の香従いてくる
大火口スレスレに溶岩冷えている
牧場のひと山越えて牛がいる
食卓のキャンドル足許の波暮れ切って

築紫野の旅

石碑に女中おうめを祀る宿
山寺の紅葉に染まる影法師
精霊の舟がよんだ岩の向き
円高と黒字べらしに喘ぐ国
身勝手なおのれを叱るお人好し

瀬戸の橋渡るは九年先のこと
橋がかかる迄の命を考える
減反をして豊作の秋になり
舌打ちをして十二月迎えられ
酒に限度ありとお酒に教えられ

愚妻です愚妻ですよと愛妻家
またの名はD51またとない畏友
切れ味のほどよき方円の和を作る

伊藤茶仏

売り物にせぬ誠実を慕われる
回想譜描くペンだこがふと疼き
御用済みのかたちに乳房たれ下がり
ふるさとの駅に迎えるまだひとり
笑わない夫婦にいつかなっている
智恵のない返事を背で聞いて出る
女難の相と当人だけおもしろい

橘高薫風

浜田久米雄

大矢十郎氏息女栄子さんの結婚を祝し
花嫁に牟婁の海山弥朗ら
三段峡にて(二句)

恐懼せり紅葉と滝の神の前
友情に深入山の名もうれし
走馬灯霊は肉より現なり
葡萄食べ終ると焼跡のような

西尾 棗

本田 恵二朗

借りに来た人情論の得手勝手
淀川を渡る汽笛に土筆のび
随筆の才女和服の似合う人
さわられて造花は哀しい言葉きく
祭り客基客となつてしまいきり

菊 澤 小松園

川柳 太平記 (7)

宗匠渡世の哀歎

東野 大八

とかく偉大なる門閥の末裔の転落は可速度である。正風蕉門の直門である後継者達がやがては雑俳の道に堕ちざるを得ね基盤には、門下個々の性格と時代の推移環境が背後にあった。支考と其角がその代表格といえよう。時は移る。流行しはやりにはやった俳諧の道を宗匠点者の生計維持が、どのようなものであったかを元禄二年に西鶴が「織留」に以下のように描いている。(芭蕉去の五年前)

「むかしは世をひまになす人あるいは神主又は武士のもてあそびけるを、近き年世上にやりすぎ人の召使いの小者下女までいたさぬものなし。(一とむかしの点者の立派さを記したあと) 今時の俳諧の点者というをみれば、きのうまで馬は生類になります。牛は

闇に二句嫌うかたとすね。はなひ草口から四枚も覚えぬ者が。菓子袋に押すようなる印判をこしらえ、軒号にびくりさせ。一句一銭の点取によめぬ所は評書なしに付墨し(略)有馬の湯は水辺になる事も。とびは俳諧やら鳥は連歌やら。何一つ聞き分る事なし(略)かりそめながらこの程の宗匠達(略)一座を見るにたとえよき句をいたしても気に入らぬ顔つきしているは、おのがよからぬ句をいたせる時のためなり。さて、下座より宗匠をさしおき平連衆さし合ひのぎんみ、これ法になき事なり。つらつらおもふに点者愚かにして徳のなき故なり。作者の貧福にかまわずまことをさばくをまことの宗匠なり」

元禄十五年刊の「花見車」の中で轍士もこ

う書いている。以下西鶴式に要用のみ採録。

「むかしと今の俳諧まず心ざしうら表にかわれり。いにしえは連衆一同興行せんと思えば、十日も前より一巡を回し、極れる日はいかほどのすき入りもかきて相つとめ、御影をかけ香をたき、一巡よみあぐるたびに、わが句の時はきつとかしらをさげてはばかるよしをのべ、会のうち物がたりもせずして、あげ句を詠む時は膝たて直し礼儀を整え、あとにていささか酒しいて、帰る時は門前にて敬うこと正し。翌日はハカマを著し宗匠のかたへ参りて昨日は御苦勞に忝けなしと、一包をへぎにのせてさし出す。

当節はさにあらず。点者の方よりひたすら会をすすめ、料理をいち早く出し先盃をとり交し、わが句まえにてなければ大きな声あららげて、嵐三右衛門はおしい事をした。中村七三はのぼらぬかと我がちにいいあいて、懐紙がどこにあるやら、点者に芸事をさすやら、帰りはいとまごいもせず。さて翌日は宗匠のかたから礼に参り、昨日は色々御馳走。ことに珍らしき貴句を承り忝くぞんじ奉るときつく礼をのべる。これあちらこちら也。

昔は短冊を頼み絵の賛をのぞむ時は、宗匠のよき相口を以って本金の色紙をつかわす。

点者も気をつくり句を改めて書くゆえに、二十日も三十日もかかってしたためつかわずと、一包みへぎにのせて礼儀をつとむ。

今はまた点者のかたよりさきに、いやがるも知らず、短冊書いて進ぜようといえ、ぼろぼろの土のこぼれる紫色の色紙を投げ出す。さらさらと書いて送るをろくに見もせず足つぎの塵箆にうち込んで、すゝはき邪魔になりてすたる。これめいわく也」

要するにこの頃の俳諧は流行るほどはやつた。反面はやればはやるほど、宗匠点者は地におちるも成行き。西鶴も徹士も住時はひとかどの宗匠点者。道のすたれの嘆きも同じなら、習う側の不作法もなじる気持は同様のようだ。徹士に至っては金一封をへぎ(三宝)に乗せて出すか、出さぬかにさもしいほどこだわっている。徹士の同じ本にこうある。

「近年桃青(芭蕉)の門人世にはびこり、諸國に頭陀横行して名古屋跡を見、または一筋をすゝめてありくに、四、五日もどめて大回しの切字はいかに、第三の字どまりはいかようにする。恋の句一句にて捨てるはいかになど伝授を語らせ、昼は会に引出し、夜は鳥の啼くまでそのかかせなどして、べつたりとくたびれかし、帰る時は集句句代ばかりさし

出して、当方より便状いつてなどたまきらわし置く也。からしり筆鞋茶酒を何をもってとのうるや。右の句料をつかうに他なし。さる衆にては出さぬ集もある由。味なき味噌をふるまい、ノミハエにいちらせ、あまつさえあとにては下手くそのなんと放外にののしる也。こののち行脚の人も方向を聞きつくりて通るべし」

ここでも徹士はカネと世間のさもしさを言いたてているが、芭蕉没後、七、八年のこのころ、いかに芭蕉の門人が、世の俳諧ばやりをいいことに、点料稼ぎで全国を歩きまわっていたかがうかがいとれる。はじめは相手も蕉門と知れば、相当の伝受料を支払うものと考えていたらしい。こうなると、カネ目当てのニセ者も現れ、しきりと田舎を荒し回つたらしい。ホンモノかニセモノか、田舎俳諧の生かじりに判るうはずもない。

芭蕉も他の宗匠と同じ様に招ぜられて俳諧の会に出席し、一座をさばっていた事は、周知の事実である。然しさすがにその一座のさばき方が、如何に芸術的で適切なるものであつたかは、その歌仙の一つ一つにも、如実にうかがいとれる。「田舎の句合」「常盤座の句会」の記録にもその例証は明白である。

しかし、この巨匠の没後は、度を越したはやる俳諧をいいことに、直門の蕉門高弟の世間に迎合した墮落が幕をあげるのである。その筆頭が蕉門の高足榎本其角(一七〇七〜四七)である。彼は生れつき豪放活潑、博学多彩の江戸っ子肌で、わび・さび・しおりの花鳥風月の開祖芭蕉とは、大いに趣きを異にし、その洒落ッ気の程のよさは、当時の江戸町民のアイドルとなった。

—あまざげに桃裏の詩人髭白し 其角
—蚊をやくや寝似が闇の私語 //

其角撰書の「虚栗」の句の中のものだ。談林的な小唄どり「目いおおい」から脱皮して、漢詩人風の寒山の禅味をまぶしたものと受取れる。「続虚栗集」にも句あり

—涼風や与一を招く女なし 其角
彼は生来、風雅一筋で身を細くする作家ではなかったのである。かくて彼が開いた、彼一流の「江戸座」俳諧から慶紀逸、柄井川柳がのちの世に育つてくるのである。

▽次号予告△

「川柳雑俳の始まり」



鈴木 黄

詠風柳多留廿五篇研究

—(二十二)---

382 ふうわふわのれんに螢来てじらし

鈴木—螢の飛び交うさまは「ふうわふわ」という感じである。これはこのまま夏の風物詩で、例えば上野とか吉原付近とかの夜景と考えてよからう。

室山—写生句としてよいのではないか。
入江—同前。

もちつとでほたるへとどく禿の手

七・14

涼台みんな立たせて螢逃げ

二七・30

八木—室山氏説贊。単なるスケッチ。吉原としてはいかん。

岡田—吉原と限定する必要はない。江戸の町中へも螢が飛んで来、珍しいので追いかける光景を詠んでいる。

383 太郎からべらぼうとなり川をこし

鈴木—川柳で「太郎」というと、先ず挙げられるのが向島弘福寺辺あたりにある鯉濃の葛西太郎であらう。

とんでもないドラどもが、先ず向島の葛西太郎で鯉を肴にパイ一やり、ほどよき頃に、隅田川を越えて吉原にくり込む、といった状

景を詠んだもの。
太郎から人間わづかなぞと行

四一・12

室山—贊。「べらぼう」は、寛文年間見世物に出た全身真黒で頭がとがり目は丸く赤く、

あごが猿のような、奇形の人をいったらしいが、穀物をつぶす、竹製の棒を「笹棒」というところから出た語でもあるらしい。ここでは、たわけの意。

入江—同。

なんにせい向ふへ越せと角田川

五・19

こいやくせもの大郎から気がそれる

四一・3

岡田—同。

384 朝鮮垣に指をくむ娘形

鈴木—「朝鮮垣」は、広辞苑によると、「一種の竹垣。堀立柱を適當の距離に建て、これに木又は竹を横に打ち付け、割竹で縦に結びつけたもの。朝鮮垣。」とある。

芝居で女形を演ずる役者は、習い性となつて手や腕は組むような男のするしぐさではなく、女のように手の指は朝鮮垣のようによく静かにしとやかに膝においている、というのであらう。

室山一贊。「娘形」は娘役専門の女形である。
う。

岡田一同。

385 まだおまめかと八聞カぬにおとる也

鈴木一 句意はつきりしないが、小さな小児の踊り子をかからかっている情景でもあろうか。踊り子に向つて、まだまだお前さんなんかは子供だろうと尋ねるか尋ねないうちに「わたしはこれでも素的な大人なのヨ」と言つて大人が踊るような踊りを踊つてみせた、とは駄劣解。

室山一 この「まめ」は、からだが丈夫なこと健康、などの義であらう。「まだお達者か」といつた失礼な挨拶(安否のたずね方)は、「聞かぬにおと(劣)る」わけである。「聞かぬにおと(劣)る」わけである。入江一前説贊。話題の主は老人。聞かれたのは妾。「あの方はまだお達者か」どうして、どうして。

八木一 室山氏説でいいと思う。

岡田一同。「お達者ですか」と聞くのなら挨拶としてわかるが、「まだお達者ですか」では、失礼な質問。質問の対象は老人にでも通る、相手の両親など老人のことでも通る。

386 具足のつくろひと歩行前九年

鈴木一 前九年の折、兵士達は具足師と共に九年間も戦い歩いたので鏝もボロボロになる。

そこで具足師に修理をさせながら戦つたであらうという句。

是で最う式りやう着切ルと前九年

一・二・24

室山一 贊。具足の修繕と歩くことで終る。

八木一 具足の繕い(師)と歩く前九年で、繕い師を連れて歩くのであろう。

青木一 具足師を連れて歩く、には不贊。軍が長びいているので身なりも乞食の一步手前、具足もつぎはぎだらけで、あたかも大きな雑布に手足が生えて歩いている様だ、というのであろう。先頃の終戦後二十九年目に投降した、ルバング島の小野田寛郎元少尉の姿と同じ事なのだろう。

「歩行」の読みは「アルク」。

有り合の物の具を着る前九年

明八様2

岡田一同。

387 木馬にて立かけをおふ春米屋

鈴木一 かつて、「春米や木馬の尻をふんでい」る」の句について、青木氏は、この「木馬」を踏臼の杵と解釈している。

何にしても、この句の意は米屋がつき立ての米の宣伝に看板を店先に出して、お客様が買いに来るのを待っているという情景を読んだ句かと思うのだが。

室山一 「木馬」は、青木説の杵。「立かけ」

は、たぶさを大きく取つて後頭部にたてかけられるようにした男の髪のかんじ方。(本物の)馬に乗つて武者を追うのに見立てて「立かけ」に結つた男を春米屋が木馬で追うように見え、というのではないか。

入江一前説贊。

木馬に棹のむちを持つ春米や

一・一六・38

西原一 「おふ」とは「目で追う」事であらう岡田一この句、ちよつと難句。室山氏説が良いか。

388 結び直すたばからとんびからす出る

鈴木一 からすとんびといえ「いか」の口の中の咀嚼器の事で、顎に相当するのであるが、この句の場合は「かもじ」の事であらう。私は髪形には弱いが、「たば」の中にかもじを入れて髪形を美しく見せるもので、遊女や伊達者が使用したと思う。

句意はこのままで、髪を結び直したら真先にかもじがとび出たというもの。

奥様の御くしにとんび鳥なし

二八・12

室山一 贊。「とんびからす」は、女の髪を結う時に使う紺ドウサという紙で作つた髷型の通称。

岡田一 「いかとんび」はかもじでなく、室山氏の通り。



二賞候補作品

同人の部

満開の花に誘われ修羅出土
八尾市 香川 酔々

菜を漬ける女の業と楽しさと
富田林市 岩田 美代

樟脳よ君と僕とは瘦せるべし
八尾市 高杉 鬼遊

家族の中で夫 他人になりやすき
大阪市 河野 君子

チャンスチャンス今良心が死んでいる
富田林市 岩田 美代

着飾らぬ女に母の顔ダブル
大阪市 那須 鎮彦

人間が棲めば灯りの洩れる窓
八尾市 香川 酔々

逆わず流れてゆけば海がある
和歌山市 津田 与史

この重さ取らねばよかった鬼の首
豊中市 安藤 寿美子

にぎりめし母の祈りのかたちして
大阪市 小出 智子

月も光ってる知恵のない貌で
富田林市 岩田 美代

コスモスの主義主張なき乱れよう
松原市 谷垣 史好

凍っても水より逃げ場のない魚
島根県 小砂 白汀

雑木林のそこから風のあたたかし
八尾市 高杉 鬼遊

リハビリで踏む自転車は倒れない
高槻市 若柳 潮花

母馬の歩巾になれば柵の道
米子市 八木 千代

つばめ来るわたしの無事を確めに
島根県 堀江 芳子

倉敷市 田垣方大

裸婦像で油断をさせた応接間

大阪市 河野君子

秋ざくら痛みをわかち合っている

米子市 石垣花子

新雪は新聞配る僕が踏み

川西市 戸田古方

入歯はずして渡したところが手術台

鳥取市 両川洋々

本妻の意地です何もかも磨く

姫路市 大原葉香

大根をおろせばボタン雪に似て

泉大津市 村上春巳

どぶ池の客電卓へうなずかず

和歌山市 垂井千寿子

ハンサムの車椅子から目をそらす

大阪市 柳原静香

春や憂し膝の小猫もみごもりぬ

米子市 八木千代

明日の灯へ鳴らしてあるく母の鈴

倉敷市 水粉千翁

白旗をいつでも出せる夫婦仲

和歌山市 西山幸

横糸を少しゆるめて妥協する

倉敷市 小幡里風

一番を守り通して父がない

神戸市 中村ゆきを

両の手でグラス温める日の判意

八尾市 香川酔々

自己主張五分進んだ時計持ち

和歌山市 松原寿子

さよならが辛い夕陽よなぜ炎える

京都市 都倉求芽

開店の定連になりそな顔はなく

橿原市 岩井本蔭棒

偉いやつ仰山居るな春叙勲

大阪市 西森花村

さあ働こう白蟻こわいことを言う

大阪市 小出智子

灰血に夫の癖が捨ててある

八尾市 高橋夕花

かなしい日も花は微笑まねばならぬ

八尾市 高杉鬼遊

踏まれたら雑草ひらき直るべし

神戸市 中村 ゆきをを
ほほえむと神に近づく知恵おくれ

生駒市 室谷 徹舟
神様よ聞いて上げてよ千羽鶴

富田林市 板尾 岳人
妻にやる風の涼しさ叛かぬか

八尾市 宮西 弥生
千本の針は女が持っている

倉敷市 水粉 千翁
道遠く追い抜く雲をとがめまい

大阪市 本間 満津子
昆布煮る匂いの中に亡母と居る

岸和田市 高橋 操子
生きのびたいのちしみ春の風

神戸市 小浜 牧人
友達は好い人ばかりさくら咲く

和歌山市 津田 与史
びくびくするな手がある足がある

倉敷市 稲田 豊作
忍従の道を論じて母哀し

藤井寺市 西 いわを
人の世の峠は見えて雲流る

島根県 堀江 芳子
今落ちる雫もまるみ失わず

松原市 谷垣 史好
お日さまが昇ると世間しらじらし

大阪市 本多 柳志
ゆずられた優待席にある自嘲

(以上の句は路郎賞候補作品の最終選に残ったものです。同一句は割愛しましたが、以下の点数には入れました。三回の中間発表から二句までは一句、四句までは二句、六句までは三句と
いうように編集部で発表。)

倉敷市 水粉 千翁
てっぺんの柿へ立話がつづき

雑踏の隣りはさすが他人さま
貧しさを越えた笑顔は母のもの

松原市 谷垣 史好
白昼に聞く尺八のニヒリズム

ハッタイ粉おれも分別臭くなり
核弾頭のような乳房が迫るなり

大阪市 本多 柳志
保釈されたように出て来た鯨尺

平和とは売れる戦争回顧録

戦陣訓社訓の中に生き残り

大阪市 那須鎮彦

働けばわかる夕陽の美しさ

同心に溶けて二人は丸く老い

野良犬の鎖の重さがわかるまい

米子市 八木千代

古机拭けば思い出喋り出し

巢立せて広角レンズ手離さぬ

牡丹散る満ちる想いに耐えかねて

泉大津市 村上春巳

苦勞などおまへんやろと馬鹿にされ

鉛筆のにおい尋常高等小学校

富田林市 岩田美代

放って置こそその内風が喋るだろう

豊中市 安藤寿美子

花菜漬屋は私の天下です

人間をやめれば風になれそうぞ

八尾市 高杉鬼遊

みなさまの銀行造花に迎えられ

外堀を埋めにやってきた笑顔

和歌山市 津田与史

話しかけたいような大きな月に会う

大阪市 河野君子

妻の旅チャンスは夫の方かも知れぬ

息子からいたわり貰う哀しみや

岡山市 時末一灯

ルームランナー二十日ネズミ思われて

一軒だけ日の丸無風になつてくる

堺市 高橋千万子

食いしばる奥歯も今は義歯となり

その中に自分が居ない日の誤算

八尾市 高橋夕花

つまずいて有情無情の人に会う

夫より威厳を示す古時計

松江市 中川晃男

のし袋思い返して一つ抜き

ふる里を町へつないで赤字バス

岡山県 嘉数千代香

春闘も駅の時計はたしかなり

定年退職麦藁帽がよう似合う

神戸市 中村ゆきを

ほだされて心の垣根はずれかけ

家背負う少女の胸にマリア像

大阪市 小出智子

人を指す不遜な指ももちあわせ

倉敷市 田垣方大

順番と言うさみしさにやがて逢う

寝屋川市 柴田恵美子

和歌山市 松原寿子

藁いっぽん火になることも知っている

大阪市 本間満津子

大阪市 川口弘生

四角いサジその律義さをうとまれる

大阪市 神夏磯道子

八尾市 宮西弥生

ほとぼりを抱くとき部屋は闇にする

青森市 工藤甲吉

松原市 玉置重人

野の仏飛鳥はやはり歩くとこ

鳥取県 林露杖

和歌山市 西山幸

春愁がその冗談を許さない

和歌山市 内芝としよ

和歌山市 垂井千寿子

昂ぶりが静まるまでの独り言

姫路市 大原葉香

守口市 野呂右近

鏡にはうつらぬ罪を持つ女

豊中市 戸田古方

八尾市 香川酔々

喝采もやがては消える闇である

豊中市 橘高薫風

神戸市 小浜牧人

離職しても朝の生玉子は咬る

枚方市 宮川珠笑

大和郡山市 森 田 カズエ

餌さとなる日のミジンコへ餌さを撒き

岡山県 出 原 敬 一

宮内庁夏に手袋よく似合い

鳥取市 両 川 洋 々

俺にも主張あるからピラ突き返す

一 般 の 部

竹原市 古 谷 節 夫

デッサンのままで成長して女

今治市 矢 野 佳 雲

考える蛙ポカンと浮いてみる

三重県 川 上 富 子

私だけ入る小さな円を描く

鳥取県 福 田 保 子

喝采のない花道を母歩く

熊本市 有 働 芳 仙

夫唱婦随ちよいちよい夫の足を踏む

柏原市 小 谷 葉 子

憎しみが解けて枯野を引返す

岡山市 船 越 汽 水

仕事場の埃は仕事場で払い

和歌山市 浦 野 和 子

繕うて繕うてきた母である

名古屋市 大 林 曲 手

人の輪に丸くなる人ならぬ人

八尾市 納 史 葉

約束を果すと眠り深くなる

大阪市 北 勝 美

裏長屋遅れおくれに鳴る時計

松原市 北 野 久 子

落着きましたよ全躰になりました

大阪市 文 川 野 生

一寸の虫を殺した手を洗う

出雲市 園 田 多 賀 子

つまずいて石の角にもある丸み

岡山市 花 田 た け 志

おどかしに使う小石なら拾う

島根県 松 本 文 子

耐えることを知って土鍋はみがかれる

広島市 す が かつこ

すばらしい情事なら合鍵を渡してもよい

大阪市 溝 沢 美 紀 子

当然なことでもこんなに喜ばれ

唐津市 田 口 虹 汀
今朝も亦無事でお早よう云う二人

大阪市 北 野 久 子
枕位置そつと直して宿の朝

西宮市 杉 村 婦 美 子
喪の席で夕餉の支度など思い

柏原市 小 谷 葉 子
花の散る軽き疑い深くなる

北九州市 三 上 春 雄
ピリオッド合掌をして医師は去り

八尾市 田 中 紀 美 子
隙のない女の部屋が見たくなり

松江市 梅 本 登 美 也
人は皆手品のように家を建て

高槻市 竹 内 花 代 子
猫の目が小鳥の動く方へ向く

★ 名古屋市 大 林 曲 ん 手
割箸で食う三食を佗びしがり

見ていれば雲は私を通り過ぎ
ひたすらに生きてく水の旨さかな

今治市 矢 野 佳 雲

銀鱗が光れば雑魚も美しい
五十階ビルの非常をどう逃げる

三重県 川 上 富 子
脅迫状書くえんぴつを光らせる

西宮市 杉 浦 婦 美 子
妥協点ちよつとずらして見ませんか

松原市 北 野 久 子
他人にゆだねた独楽はよく回る

眼を閉じてあなたの笑顔なら描ける
倅せな顔の皺なら気にすまい

逢えるような予感でひらくコンパクト
逢うて別れて風に鳴るものまでいと

遅咲きの花は表情変えて咲き
八尾市 納 史 葉

雑踏にさみしがりやの靴がいる
現実のきびしさ玉手箱開く

大阪市 文 川 一 念
無精髭少年Aと思われず

一億の人がいながら誰も来ぬ
草の匂いさせて子供ら通りすぎ

島根県 松 本 文 子

停年も一つの坂として越そう

羽曳野市 麻野 幽 玄

旧道の賑わい桜咲くあいだ

高槻市 竹内 花代子

鳩が二羽帰りそこねた屋根にいる

岸和田市 池田 香珠夫

夕立の間も噴水は立ち続け

海南市 牛尾 緑 楼

子を叱る声がいつもの朝にする

岡山県 池田 半 仙

肩書きに人間性が縛られる

広島市 すが かつこ

人参を切るとレモンを切りたくなっていく

大阪市 溝 美紀子

蜘蛛の糸脱げばからみつく仕掛

八尾市 田 中 紀美子

忘れ物取りに戻れば揉めている

(小出智子・河野君子—整理)

雅号ぶつちやけばなし

(175)

丁度十年前、むらくもの孝華さんから
すすめられ、川柳の道へ仲間入りいたし
ました。

本名は喜美江ですが、孝華さんから榎の木がいつま
でも緑の色で大きく育つようにと、みどりの号を付け
て頂きました。

しかし名前通りに育てる事が出来ず、十年の間には
主人の転動にて家をはなれたり、交通事故にあってたり
また一昨年秋には突然な夫の急死等と、つい勉強する
事が出来ず足踏みしております。

それでも最近少しでも心の中を広くもって、日々の
事を川柳にたくして精進してゆきたいと念じておりま
す。

今日の事明るく虹の句が生まれ



と
が

み どり

み
ど
り

「雅号ぶつちやけばなし」
「一分間の柳論」

の原稿をたくさんいただいています
こんな小っぼけなスペースなのに、毎号
なかなかとれないのです。「座右の句・
私の句」は毎号二組ずつ消化できますが
「雅号」と「一分間」はどうしてもお
れ勝ちになります。

「雅号ぶつちやけばなし」は「この人
の雅号、なんと読むのかな？」とか「こ
の人、男性か？女性かな？」という方々
が優先的にご登場ねがうことになりま
す。または、本名らしいがアヤしいぞ、
という方にも原稿依頼が飛ぶのですが、
やはり本名だったという人もいました。

— 編集部

水煙抄

正本水客選

和歌山市 浦野 和子

減食へ口なかなか承知せず
木犀の匂と秋の夜を歩く

今治市 矢野 佳雲

高原の雲回想を乗せて来る
一匹の蠅 白壁を白くする
半音を下げると日本の唄になる
したたかに生きて退窟などしない
輪の中で心は外に遊ばせる
遠い日の喝采枷とも力とも

東京都 村上 由希子

出不精が靴を磨いているいい日
花が好き人の世話好き日多忙
切り札を出せばこちらも傷がつき
フラミンゴのよう休んでるシヨベルカー
端っこをねらう生きかただである

京都市 松川 芳子

しあわせ芝居一生これを演じよう
秋雨に今日は遠くへ手紙書く
向日葵の恋は出来ぬか人妻は
盆栽のリングに我を見てしまふ
洗わずにすむ髪を洗って風寒し

高槻市 竹内 花代子

旅うれし窓辺で水車のきしむ宿
曼珠沙華黄金の波を分ける赤
コスモスの根じめのように道祖神
流行は片方で足りるイヤリング
妻荷物夫カメラの旅でよし

愛媛県 宮尾 みのり

袂着た子供たもとの歩きよう
松茸とすだちスーパは抱き合わせ
枝付きの栗はしばらく活けて置く

病院の屋上青い空がある
付添いの終日消えぬクレゾール

ベッド空くその日病室押し黙り
それぞれの部屋にこもって母の留守
手を切ってから包丁のさび気付く

熊本市 有働芳仙

酔っている時の貴方は暖かい
ふと嫁の若さが憎い姫鏡
酔いがさめると無邪気な奴ですがね
財布など持たず気前のいい若さ
テレビではあんなに切れる日本刀

三重県 川上富子

帯きつく夫の代理として座る
会費分きっちり酔うて父帰る
夢の中なれば本心見せられる
底辺に居るから何もかも見える
白旗を一本ずつ持ち夫婦です

和歌山市 福本英子

豊作の稲田を嗤う彼岸花
曼珠沙華炎へたぎらせて夕陽入る
生きているからお互いぐちを言う
妻という余韻なかなか消え去らず
アンテナの隙間に素顔の大都会

出雲市 板垣夢酔

どうでもいい結論暇人出したがる
古傷にふれあいたがる倦怠期
大空の自由を求めて凧切れる

疲労から入れ歯がとつても重くなる
ピフテキを喰って仇討ちした気分

愛知県 池田香珠夫

金木犀樹下集会の白い杖
とかげ居た床几に誰も腰かけず
花を摘む手許に蝶がまといつき
孫寄せて迎え火教えている老女
マラソンのトップかげろいながら去る

松江市 梅本登美也

日本が有事だなどとあわて出し
二三枚写真はがして嫁に行き
おやママが意外に早い運動会
留守にきて押し入れなんか明けてみる
片隅に律義な父が靴を脱ぐ

新潟県 高野不二

危険物処理に意見の合わぬ妻
血を吸うに命をかけて蚊が生きる
左遷とは云わないままに送る会
役人の中にも頭下げる役
必要経費としてネクタイを新調す

川西市 氏林洋敏

残暑なお厳しく不況乗り切れず
入院しても時刻表離さない
宅造がだめなら霊園墓地とする
結婚の秋へ私も身がまえる

幸せのリズム朝から腹が減り

島根県 角 一耕 草

むつつりとして豊作の稲を刈る

鶴が来る分校の子の餌集め

柿たわわ父の忌日が近くなり

紅葉掃く尼僧が綺麗すぎるなり

国道で化粧を直す梨娘

旭川市 朝倉大柏

イメージを描けと先生嘘描かせ

父も娘も息子も好きな赤いシャツ

別れるとなれば被害者女なり

どん底にいて福耳を羨やまれ

要件があつて娘の赤電話

竹原市 古谷節夫

面構えや良し男の臭いさせ

けん制球コロコロドラマは逆転し

上役を魚に苦いグラス干し

ちゃらんぼらん中年女の魅力かも

駆け落ちの二人に雪も降り始め

東大阪府 萩尾真佐志

ドツと吐き出してラッシュのエネルギー

地に還る木の葉悲しい舞を見せ

正直な心に月が美しい

ゴキブリの生きる動きを何故厭う

年寄のひや水で良し朝を駆け

羽島市 伊藤 静

亡夫よりも二倍の齡を永らえて

枯蓮になって無残な影落す

月白く冷えつものりつつ鵜飼果つ

夕顔の朝もしほまぬ頃となり

無花果が一つ熟れたよ仏壇へ

唐津市 松垣岩光

飛行雲だけが残つて空青し

日曜の我が家テレビもまだ寝てる

ボタンから見ればファスナー無精者

この店もみどりあけみがある場合

不況風ネオンも一字消えたまま

竹原市 岩本寛子

愚なる女と自覚する日暮れ

待ちつつけ女指おる癖をもつ

秋空の青にやさしさ見つけたり

寝ころべば天と地私をはさんでる

無欲にはあともう一步墨をする

兵庫県 辻 文平

逆らわぬ女となって妻も老う

ピカソの絵見てたら父の顔になる

黙りこくつてる方がほんとの僕なのか

雑兵の烏合の衆となり終る

大和高田市 岸本豊平次

地下街で傘のしずくが邪魔になり
石垣の小さい石にもある重み
丸顔で気のいい人にされている

大阪市 溝淵 美紀子

呼びかけたくなるよな月の美しさ
なんとなく心寂しく花を買う
努力する心を持たぬ子に育ち
季節感なくして果物顔を出し

岡山県 岩道 博友

競争心持たせて上手に合理化す
何着ても様にならない足の位置
家を継ぐ話が定って新車買う
余生から信念安売りして終い

総社市 水子 つるえ

孫の詩でした新聞読み直す
ガミガミと教えてくれる有難さ
手の中のセキセイ私を知っている
心地よい疲れに嫁の荷が届き

東予市 小山 悠泉

妥協仕度いと思う夫のせき払い
つまずいて弱気になった父の酒
勝算があつて秘策を口にせず
チャンス待つ男反旗を胸に持つ

今治市 渡辺 南奉

善人で通し疲れて帰る靴

無い袖も振る日団地の住みにくし
ノースリーブ女にすぎが多すぎる
どの蟻もわき目をふらず夏最中

岡山市 砂田 静佳

容赦なく老人病と聴診器
紅葉一枚一まい秋を連れて来る
太い指土の言葉がよくわかり
南紀旅行
老人の歯が抜けたよう橋杭岩

藤井寺市 中原 比呂志

良い事だけ温めておく年の暮
古本に未熟な赤線引いてある
託児所へベタル踏む顔ママの顔
祝電が部屋間違えるめでたい日

羽曳野市 麻野 幽玄

旧道にはいって故郷らしく成り
水掛けのコツ枯らしたりもして覚え
蚊に成ってポーフラ飛べるのに気付き
秋の陽が鐘の余韻に落ちる京

岡山市 原田 凡太郎

昼の月わたしのように忘れられ
正論を吐いて裏切者にされ
本当のわたしに今日も意見され
冬の雨わたしの過去に触れたがり

大阪市 岩井 公平

クーラーがやっと休める風が吹き
落ち葉いま大地に帰るやすらぎに
遠山に雪見えて白樺散りいそぎ
精薄の子にも小鳩が来てとまる

海南市 牛尾 緑 楼

異端者のように歩道へ押しやられ
円形の卓にはつけぬ父と子と
占いが好きな女で夢を持つ
一徹を通して老いの確かな歩

竹原市 古田 鈍 舟

道しるべ一つ一つが曲り角
仮面かぶって本音はいてみる
ものいわず去って行くのかうろこ雲
雑草の寸暇おしんで背伸する

鳥根県 松 本文子

風を待つ主役を下りた風車
花生けて花のことばをきいてやる
笑わねば明日が来ない裏通り
真実を写して鏡憎まれる

大阪市 白石 潔

先様はちっとも知らぬ恋である
ライバルの左遷しんから喜べず
ああショックまたも座席をゆずられる
落書の漫画叱れぬうまい出来

呉市 山根 喜代美

禁断の実を食べてしまった風あたり
ライバルを意識小石にけつまずき
波に乗る人へ視線が冷めたくて
淋しさのおさまる彩が見あたらず

倉敷市 中津 伊勢吉

信用の店でガラスも透きとおり
お隣が初孫のおしめ高く干し
反論が好きで一生出世せず
草の種生きぬく知恵は風に乗る

鳥取市 中森 葉士人

秋の窓たのしいことだけ考える
わがままをゆるされている檻の猿
虹を追う私に足がついて来ず
検温の今朝のナースの手が冷える

唐津市 田口 虹 汀

初荷来る天地無用の品ばかり
穢土浄土同じ踵で踏んで住み
占いが続くペチカの火が赤い
羽田までつづく尾灯の数を読む

寝屋川市 小林 鯛牙子

秋風におんどり声を正しゅうし
へらへらしても四十は四十
倦怠期按摩しおうて切りぬける
真実の夕日の声を聴かんとす

名古屋市 越村 枯 梢

打ち明けられた恋は古希にもなつてから
背伸びしてアキレス腱の切れるまで
木枯しに冬眠が欲しいなと思ふ
雨上がりでんでん虫の詩をきく

岡山市 清水 金太郎

決心がついて歩幅が広くなり
体に気をつけてと働かず
気の早いichyouの葉から秋を知り
友の死に仕事するのが馬鹿らしく

岡山市 串田 句味地

立ち並ぶ稲架蒜山の金風屏
姿ずし祭の味で届けられ
落葉焚く煙へ愚痴をこずける
深む秋日だまり嗅いで蜂が来る

高松市 嶋田 扶実雄

人間の愛置き忘れ別居する
秋祭り弾むでもなき灯を入れる
人情の便り届ける秋の虫
悲しさに神の加護から遠ざかる

尾鷲市 渡辺 伊津志

一テンポ遅れて真面目頼みに来
カミノリは無限の可能性を秘め
但し書などはセールのス気にしない
縦糸の切れた社会をなすり合い

岡山市 船越 汽水

生き恥を曝すネクタイかも知れず
碑の語る命の重さかな
病院できれいな嘘を聞いてやる
北風とならば昇っていく風で

出雲市 園山 栄

風のない空で風車が夢を見る
どうやって食うのか野犬の弟子になる
行先に悲しい女の性が待つ
千の罪業をさらして死ねと云う

大阪市 本多 俊子

来年も咲かせる惜しい枝を剪り
糠漬の刻むに耐えぬ茄子の艶
旅先からの電話で鉢に水をやる
布団干せば昨夜の夢が残り居し

豊中市 田中 善四郎

ゆずり合い嫁と姑の目が笑う
幸せが過ぎて幸せ怖くなり
冬の風合掌の手が冷えて来る
停退の官吏の店番愛想よし

大阪市 堀口 欣一

駿河屋のマークお目出度ずくめなり
京はよし御所のお庭に虫が鳴く
青年の集い土佐弁憚らず
ふるさとの若狭の海の石飾る

岡山県 柳原 孝柳

冬の夜は去年とちがう灯がこぼれ

冬の海一人が似合う淋しがり

北風を真近に聞いてかまを研ぐ

朝の妻無口でみそ汁冷えている

大洲市 横田 放人

酔うほどに盃軽く軽くなり

霧包む街路に朝は朝の人

朝礼の話題をかえた蟬しぐれ

裏側を見られてからの月わびし

今治市 園部 正則

地から二尺しか飛ばぬ季節遅れの蝶

からだ全部が口になって泣きたい叫び

ノイローゼ情報社会の落し穴

五十歳老いの断面ちよつと見せ

富田林市 中村 優

説教へ背筋を伸ばす老神父

カラオケを離れて唄う子守唄

底辺の人の情がよく光る

戦争のミニ過激派と機動隊

大阪市 欄 蘭

斗病の身には同じ日課の大晦日

餅搗機男手伝う事もなし

空の青洗濯物が白く映え

秋深し心の奥に孤独感

広島市 光井 みほ

生きてゆく勇氣の欲しい汽車に乗る

友情のかげに隠れたある打算

風鈴よこの寂しさを知ってるか

友の背が笑顔の裏を写してる

泉佐野市 大江 静子

そよ風にころぶ枯葉に追い越され

あと一つに未練をかけて枝が折れ

ほけにけり灰皿冷蔵庫に眠り

叱られて眼鏡はずすもどかしげ

岡山市 花田 たけ志

余生にも昔の不徳が顔を出す

年輪で世俗にたけた助け舟

わき道に冷やかされている回り道

御意見を冗談として聞かせてみ

倉敷市 中島 彩平

組板へ愚痴も重ねて瓜きざむ

客を待つ心打水撒いてから

手の届く距離中にして不信任

祝い客去れば静かな元の部屋

大阪市 新川 貞祐

神仏にすがらぬ不遜七十九

終日をパジャマで過す日がふえる

法善寺大物も与太もここを抜け

敬老の日友の訃音が又ひとつ

岡山市 井上 柳五郎

ある日ふと他人の顔を妻に見る
旅慣れた手つきで土産さっさ買う
縁結びの出雲へ男ひとり旅

岡山県 二宗 吟平

疑えば顔に？マークつく

金のいる役へ拍手で迎えられ
後押しはいらぬ覚悟の車引き

寝屋川市 稲葉 好子

酒飲んで話す口調が父に似る

夫婦仲マイホーム手にして崩れかけ
初孫の声耳にして去りがたく

唐津市 桑原 掬治

正面から言えぬ相手の目が憎い

過一度子からの電話妻のもの
みかん山昔の夢は遠く去る

出雲市 園山 多賀子

率直に老老認めて楽に生き

民謡の中に方言生きて住む
目覚しは鳴るのが使命確認はせず

大阪市 中辻 千子

言いたい事言つてケロリと親子なり

宿替えに我が子の価値を見せられる
我が土地と思えば嬉し土の色

八戸市 島田 昭治

舐めるよに飲んで酒好き話好き

合いの手でその気にさせる聞き上手
馬鹿でいい僕の心が満つるなら

長崎県 岩崎 和子

嫁姑寄らず離れず気をつかい

誰からも馬鹿にされてる人のよさ
裏表知つてるような眼を配り

松江市 黒目 大鳥

のど仏つき出し仰ぐ揚雲雀

炎るものちりばめすぎて近寄れず
竹林にひびく琴の音も城下町

出雲市 板垣 夢酔

枯れ草の死骸を包む雪の白

年の瀬に金の絡んだ記事多し
招き猫不況で座布団はがされる

山口県 高崎 雀声

結婚の噂本当にしてしまう

ポスターのごとき女のいない浜
子と遊ぶ親は上手に負けておく

島根県 岩田 三和

蒸かし芋でっかい奴にたじろかず

日食を覗きなるほど嘘でない
引火力強い女にマッチする

橋本市 岩倉 天彦

将棋盤運んで負けてお茶を入れ

主導権妻にとられてする欠伸

妻バイト日本の男子針を持ち

大阪市 品川 正次

寝屋川市 福富 隆子

秋風へ団扇すきまに落ちたまま

天皇も年を取られた園遊会

負けて勝つふんぎりへ挑戦す

キナくさい有事立法消すテレビ
前うしろデボチン孫は賢しこかろ
古稀すぎて墓参の軽い足となる

兵庫県 高橋 近江

東広島市 石井 さわ子

かさこそと落葉がぐちをこぼして

古い二人はなればなれの部屋に居て

しみじみと虫の声聞くしまい風呂

自任するちっぼけながら行動派
うれしさが顔いっぱい歌になり
支払いは老妻おとぼけして値切る

尼崎市 中谷 利美

羽咋市 三宅 ろ亭

妻に酌ぐ酒は七分めほどにして

古い二人茶番劇日日演ず

農協も負けずに広告入れてくる

俺に金貸せと下には下があり
先に手を出した弱身につけ込まれ
長男の扶養家族に成り下り

高槻市 大垣 たもつ

唐津市 岩崎 実

行雲流れただ念仏があるばかり

子に孫に伝えて小さき碑を祀る

ここよりははいれませぬとのぞかせる

有り余る米を値下げもせず蔵い
冬に向く金魚の動き鈍くなり
一灯の下で父子の箸を置く

長崎市 村崎 三車

町田市 竹内 紫 鏑

エレベーター警句の響く人を乗せ

市場籠ドイツで食べたパンつかむ

企業秘密水族館に似るコース

脚光を浴びるロビーの野心作
欲すてぬ心で坐禅の中にいる
雑音を背に受け流す廻り椅子

大阪市 平井 露 芳

兵庫県 野々口 ゆう也

銀髪を撫れば一本掌にからみ

きっかけを作る波長が合わぬまま

大ジョッキ無理を忘れる音で干し

レントゲン古代の謎も写し出し
墓洗う水で御先祖目を覚まし
年寄りの運動ひたすら歩くだけ

和歌山市 坂口 公子

愛情を針で突いたら炎えるだけ
サボテンの棘ならはつきり目に見える
平凡が喜怒哀楽を助長する

和歌山市 堀端 三男

手さぐりで干支一まわり生きている

逃げ道のないまま親の仮面着る

逃げ道をつくる心は負けている

岡山市 池田 半仙

寸暇にも掃除々と妻の性

ダムの底割れても雨を待ちつづけ

体験と云う自信ある知恵を持ち

大阪市 三宅 モト

車椅子月を追いつつ散歩道

一人っ子夫婦で見に行く運動会

かまきりまで飼っている都会の子

呉市 玉木 志恵子

実力を出し切る若さもう一度

煩惱を捨てろ捨てろと数珠をくり

喝采に甘え自分を見失い

青森県 波 ただお

躓きもわが人生の味となる

お隣りの赤ちゃんネコの声で泣く

バスの中小銭懐中で確かめる

唐津市 筒井 朴龍

無責任時代が集金鬼にする

日掛屋の笑顔で良縁担ぎ込み
菌さわぎ旅の土産も疑ぐられ

橋本市 森脇 善彦

改築のプラン新築まで待とう

声だけで驚いていて驚いた

展示会景品だけの挨拶し

吹田市 藤原 世史春

ほほえみが外交官の武器という

ヤクザには予備の命があるのかな

紙函も時には猫の咎なり

大阪市 野田 君枝

人生の余白のような敬老日

銀座の灯自衛隊機を浮気させ

岸和田市 吉田 とも子

商はつき合いにあり酒かわす

エリートが寄れば話題になる母校

青森県 五十嵐 操史

冬になる陽射し一杯猫が戯れ

恐ろしい見幕で集金断られ

唐津市 浜本 義美

運動会孫の出番で立ち上がり

家の普請止めてお寺の寄付はずむ

豊中市 満仲 きく子

見ていたら吸いこまれそう秋の空

阿呆になることが賢い嫁なのか

鳥根県 佐々木 裕

正直な母だませないだますまい
病妻をいたわる今日の市場籠

鳥取県 加藤 茶人

子はずめがはじめてあがる屋根日向
大阪市 向井 しづ子

鳥取県 和井 観洋

水ききん晴れま晴れまが気にかかり
唐津市 玉置 倅

鳥取県 和井 観洋

風のない日のまわらない風車小屋
鳥取県 (10歳) 和井 貴久

兵庫県 川井 白峯

★
恋をせよせよと燃えるか曼珠沙華
大洲市 米澤 暁明

樞原市 西本 保夫

名月へやれ間にあった薄の穂
見送りの母気をつけて気をつけて
野仏を若がえらせて曼珠沙華

出雲市 高見 鐘堂

好きな人出来て少女が花を撰る
岐阜市 市川 鱗魚

大阪市 藤森 小雅子

ふり出しへ戻るけじめの十二月
少し餌が切れて鳥籠黙る暮
愛の告白に鶴折るラブレター

唐津市 山下 勝一

噂では僕が主役の旅の恥
死んでまだ時効にならぬ旅の恥
老いらくの恋にぎっくり腰疼き
老い知った日から鏡が怖くなり

東京都 池口 呑歩

妻のしわ鏡の中も同じ数
生きる幸亡父の写真に云つてみる
一寸の虫が鳴いてる日の主張
子の明日を思う母ならもう泣けぬ
山幾つ越えただろわか六十路
機嫌よく妻振る舞えば給料日
鯖寿司に丹波の秋が偲ばれる
正月を三月も早く秋終えぬ
定年の距離をちぢめる朝の道
上長に気易く言えてもう定年
苦勞した人ね手のしわ顔のしわ
亡き父母をまねて人間らしく生き
割切つて二度の勤めの定期券
慇懃に上司の示唆を惚けてきく
法と鉄使いようでは武器となり
空っ風また騒がしき暮となり

倉吉市 野中 御前

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

伊藤 茶 仏

善人の十指は拳作らない

岩本雀踊子

コンピュータに装置された句想を、ポンポン弾き出し句箋に清記する。しかも、三度のめしより、川柳が好きという人柄が彷彿として、楽しませてくれる、老練な句。

たぐれの厨に母のいる温み

高橋 夕花

核家族化が進み、共稼ぎ世帯が多くなった「只今」の声に、厨から「お帰らなさい」と迎えてくれる母、親子の対話はこうした土壌に培かれる。

週休二日男いよいよ嵩高い

市場没食子

日本人の働きすぎが、とかくの論議を呼び週休二日制が定着する中で、戸惑い勝ちなひと駒であらう。

弱いのネ貯めた盃のんでくれ

藤井 明朝

ちよっと口づけた盃が、唐津屋さんほどに貯めてある。弱いのネで、やとなであろうと想像がつく、この句は「貯めた盃」で生きている。類想句が多いのではなからうか。

ファスナーが何かはさんだあわてよう

両川 洋々

ファスナーの用途は無限であると、豪語したY社は、田舎の小企業から一躍ファスナーの世界市場を制覇した。焦れば焦れる程ファスナーは喰い込む、上にも下にも動かない。この「何かはさんだ」がよく効いている。

バスタオル巻いて受話器へ走らされ

藤村 め女

恥らもお色気もちよっぴり、湯気に上気した中年女性の仕草が眼に見えるようであるボタンかけ違えたままの父であり

落合 思月

老夫婦の生態は、お互いにいたわり合はげまし合いながら、老後の生き甲斐を求めてゆく。そのバランスが崩れた時、人間誰しも惘然となる。奥さまの平癒を祈って止まない

居酒屋の床机に年金坐り馴れ

月原 宵明

社会保障制度が確立し、安定した老後を保障されたとしても。酒に憂さを晴らす光景は先達諸国でもよく見受られる。誰にも気兼ねのない年金で酒を飲む。度を越してはダメ。

手を出しただけで妻にはすぐ分り

堀江 正朗

視線すこしはすずして痛いところ突き

堀江 芳子

毎号欠かさずペアで発表される作品は、老練で仲間いおしどり夫婦と推理していた。集印の序にさっと拝んどき

湯の宿で若やぐ妻の仮になる

傍島 静馬

退院一周年の句があるからお元氣になられた様子を伺ってホッとした。明治の風格を持った作家は稀少価値でもある。ご自愛の程を

白内障月が分裂してよう

山川 阿茶

女医として聴診器を離れ、悠々自適の心境を句にされている、悟りきったお姿を思ひ浮べ乍ら、いつまでもお達者で、先生より多少若いと思っている私も老人性白内障で治療中

水着ショー変ったヘソも見せてくれ

原田 明春

水着とヘソのユーモラスが絶妙、変ったヘソもの(も)が効いている。

飲め飲めの猪口をこの頃逃げる老い

河村 日濤

滅法お酒に弱くなったと思うのだが、飲み口が昔とったきねづかで、いける口と見做され易い、逃げる口実を考え乍ら飲む酒は、最初の二、三盃程度が上乘であらう。慎しんで飲む酒も格別、ホロリ酔った気分は桜色。

喪が続く秋のどこかに落し穴

森井 著居

記録破りの猛暑にしびれをきらしたかのよう、秋ともなれば、バタバタあの世に旅立つ人が多い、五日連続の通夜から帰宅。合掌

愛染帖

橘高薫風選

大阪市 西 出一栄

菊日和明治は天下を嘆ずなり

月煌煌老いし夫婦に対話なく

心齋橋今日の匂いも嗅いで来る

大阪市 小 出 智 子

ふる里の山は懺悔をさせたがる

約束を果して銀杏散り急ぐ

何でも話せるひとと夕べの柿を剝く

青森市 工 藤 甲 吉

快男子とも言われたが白い杖

男のロマン正々と堂々と

八尾市 大 路 美 幸

十字架の確かに残る火の匂い

影のない南瓜ゴロゴロ終電車

東京都 山 根 白 星

冷やにする酒に失意のいやませり

生やさんとする髭生えぬテロリスト

島根県 小 砂 白 汀

妻の留守電話は魔法のランブダナ

メヌエット悲しきころ串刺しに

和歌山市 桑 原 道 夫

綱渡りではなし芝生を歩いてる
ポケットの塵と親しい劇場よ

和歌山市 西 山 幸

毒舌の底の優しさ哀しさよ

手鏡は秋のためいき持っている

愛知県 池 田 香 珠 夫

五重塔陽炎に揺れ水に揺れ

蟹つまむ蟹より赤く爪染めて

八尾市 高 橋 夕 花

魂をしばらく放つ闇の中

ブルーで塗り潰したある日の自画像

神戸市 宇 佐 美 和 子

抱かれてからシャガールの絵の蒼さ

満月や溺れていった沈丁花

和歌山市 松 原 寿 子

真実を生きたい石も流される

鈴が掌に踊るあなたに逢えた日は

倉敷市 水 粉 千 翁

よるこびを合わせて秋の袴匂う

涯しなき道を開かんナイフ入れ

伊丹市 榎 谷 寿 馬

下り坂歩く自信を持ち歩く

シャム猫を膝に菩薩の故郷想う

富田林市 中 村 優

桐一葉天眼鏡を手のひらに

偽善者のネクタイ今朝の柄が地味

八戸市 小 泉 紫 峰

生き抜いて師の名言が今に生き

屈辱に目を伏せ老残花と私語

長崎市 村 崎 三 車

骨董を包む白さを噛みしめる

真夜中の電話やっぱりプロポーズ

大阪市 新 川 貞 祐

お別れの眼鏡は膝で握りしめ

元町を汐気の利いた男連れ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

腐っても鯛と言われている再起

当局に適材適所で牛耳られ

岡山市 川 端 柳 子

金木犀そこら辺りを聖域に

落し物したよに悔の残る道

室戸市 石 建 よ し み

木犀が見返美人をつくる道

陰口言ったにがさに遠回り

枚方市 宮 川 珠 笑

木犀の香など気づかぬ立話

秋深し食餌療法強いられる

昨日ならOKしたという女

橋本市 森 脇 善 彦

ゴキブリと云うが蜜など盗まない

唐津市 田 口 虹 汀

極楽と思う散華の中に座し

占いが続くベチカの火が赤い

平田市 久 家 代 仕 男

人間のエゴを檻から眼鏡猿

堺市 河 内 天 笑

力んでるところを背中から見られ

鳥取市 中 森 葉 士 人

朝月は失いかけている愛で

西宮市 朝 山 千 世 子

運動会パンツで民謡味気なし

鳥取市 河 村 日 満

ポストまで潤歩す父の下駄の音

夜も昼も素顔見せない女なり

火を炊けば大豆の煮えるあさはかさ

希望退職しても新車も買う余裕

花言葉通じるように水をやり

ひねくれた胡瓜しじみみがある

満月へ祈りのように谷間の灯

余白の白さが緯を生かしてた

公私共多忙殊更私に忙し

米粒に時の流れが刻まれる

袖子の香が老いに過ぎし日語らせる

老先など思う窓辺に舞う枯葉

息子五人されどお医者も響が継ぎ

女だけ働く島の海さけい

小さい名刺だが高くつく名取料

半径の開き具合の違う日

貝塚市

鳥取県

高槻市

尾鷲市

富田林市

豊原川市

川西市

唐津市

松本市

梅本市

守口市

宝塚市

岡山県

今治市

唐津市

羽咋市

行天千代

鈴木村

若柳潮花

渡辺伊津志

岩田美代

小林鯛牙子

戸田古方

松垣岩光

梅本登美也

野呂右近

吉田笑女

直原七面山

越智一水

山下勝一

三宅ろ亭

人形がまばたきをした晴衣裳

文明のもろさ教えて水飢饉

信仰はなき日本人の手のカメラ

ローカル綿雨が降って又止んで

若く近く女を憶う彼岸花

歩道橋しよせん天下は取れもせず

身内にはせぬ親切を友にする

検温器銜えて余命考える

タミナルやつと笑顔を見つたり

松茸を買うレジスタンスだつてある

わが青春鳴つては過ぎる風の音

ひらかなの持つ優しさがあなどれず

マスコミが時の言葉ももてあそび

まっ直な坂は走ってみたくなる

人間が嘘つきあつて四海波

旭川市

唐津市

岡山県

京都市

藤井寺市

倉敷市

唐津市

倉敷市

和歌山市

高根県

大阪市

岡山市

尼崎市

倉敷市

朝倉大柏

桑原掬治

白岩文衛

松川杜的

西いわを

藤原桜山

新岡回天子

斎藤通風

若宮武雄

津田与史

楠原秀子

川口弘生

井上柳五郎

黒川紫香

小幡里風

手鏡で二十才の頃を探している

平均寿命益軒訓に異議があり

亡夫の声テープで聞けば涙湧く

正論も反論も吐き五十年

街路樹をばつさり秋を追い出す気

花を買う中にお世辞の云えぬ客

曖昧な答で国会幕おろし

神棚に住んでゴキブリおがまれる

皆さんが泣いて下さる望郷歌

家族中畑で眺めた好い夕陽

女房の人情脆さにも呆れ

風向きに夫婦が思案する波止場

倒伏の稲に燃え立つ曼珠沙華

踊る阿呆見てる阿呆もくたびれる

見栄でない特急券で用を足し

岡山県

新宮市

東大阪市

倉敷市

京都市

羽曳野市

米子市

豊原川市

高根県

岡山県

岡山県

高根県

唐津市

大坂市

東大阪市

出雲市

原敬一

大矢十郎

竹中綾女

中津伊勢吉

都倉求芽

麻野幽玄

石垣花子

宮尾あいき

岩田三和

岩道博友

池田半仙

西村早苗

岩崎実

欄

桑原喜風

板垣夢醉

婦人会 灰皿も酒も要ると知り

鳥根県

飯塚 虎 秋

肩叩くわが子のような廻り椅子

東宁市

小山 悠 泉

姫だるまに夫婦げんかを見つめられ

尼崎市

中辻 千 子

明日明日明日が除夜の鐘を聞く

喜屋川市

稲葉 好 子

トンネルを幾つ抜けたら孫の顔

倉敷市

藤井 春 日

無実の罪背負うて獄舎の中で老い

名古屋市

越村 枯 梢

幸福行き鉄路を歩く乗り遅れ

大阪市

北 勝 美

法灯に千年の煤黒光り

松江市

黒目 大 鳥

しめやかな葬儀ひそかに母語る

堺市

高橋 千 万 子

逆効果なんて叱らぬ子に育て

今治市

園部 正 則

二人分の淋しさを抱きとめし母

山口県

高崎 雀 声

テレビ程料理はうまく出来ぬ卓

京都市

山本 規 不 風

薄情な人相じゃないかと鏡見る

唐津市

浜本 義 美

出勤の妻の背中が丸く見え

倉吉市

野中 御 前

休耕田稲穂の夢を見てなげき

〔評〕一栄さんは老米、健康を損ね入退院

を繰り返しておられるようだが、明治人間の
気骨で頑張り通された。句にもその精神力が
見える。殊に第二句はすばらしい。感慨は深
いものを持つが、身体的な億劫さから会話の
ない老夫婦だ。一栄さんは、いつもご自分の
句を作っておられるのが強味だ。

智子さんの句の柿は「何でも話せるひと」
に最もふさわしい果物だ。第二句は、主観の
強いものだが、擬人法の成功の故か伝達力が
備わっている。甲吉さんにかかると第二句の
ようなにも格が出てくるから不思議だ。美
幸さんの、「確かに」の措辞は賛否に分れる
おそれがある。作品とは、常にそうしたもの
だ。「火の匂い」は旨い。八尾在住の三人は
興味深い存在で、酔々さんの句には格調と句
いがある。鬼遊さんは発想の良さに抜んでて
いる。美幸さんは現代的なセンスに溢れ、年
も若いだけに一番楽しみな作家だ。既成作品
の真似事から脱したとき本領を発揮されるこ
とだろう。

白星さんのテロリストに対する痛烈な皮
肉で、テロリストにも見てくれが必要なので
ある。白江さんは今月は感覚に訴えた句ばか
りだったが、穿ちを縦横に駆使した批判句
に鋭いものを持つ作家だ。道夫さんの句、ど
こをどう気取に歩いてもよい芝生だが、まる
で網渡りの時のような心が兆したのだろう。

常に緊張感をともなう人間にひらめく事実か
も知れず、それを作者は殊更に興じがって詠
まれたのだ。この心は読者に通じたら、成程
としたり顔になる筈だ。

幸さんは、女性としては感覚だけでなく批
判の心象の句に優れたものがある。だから、
これら二句は幸さんの両輪を示したものと云
える。香珠夫さんの句も、五重塔の高さが旨
く強調表現出来ている。抒景句として優れた
ものだ。

夕花さんの句、「しばらく放つ」によって
放心ではないことが窺える。意識的作爲の魂
の遊泳なのだ。闇の濃さが感じられた。美和
子さんの、シャガールの絵を知る者と知ら
ないものとは印象に大きな距りがあること
だろうが、知らない者も大凡の想像はつく。
個に勝った作品だ。夕花さんの自画像のブル
ーは普遍性の句だから比較するとよい。

寿子さんの句は、いつも正直で澄んでいて
快い。人柄なのだろう。柳子さん、よしみさ
ん、珠笑さん三様の木犀が咲いた。代仕男さ
んの句、動物が檻から人間を眺めると云う作
品は今迄多く発表されているが、この「めが
ね猿」の眼鏡は正に極付けの感がある。作品
にも改善は多いが改善は稀にしかない。

— 投句先 —

〒560 豊中市中校塚三丁目一三の一五

橋高 薫 風

本社へ他の原稿と同封すれば、その区
分けなどに係りが困りますので、ご投句
はかならず選者あてにお願いします。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

小西雄々

拾われるようにパートのバスを待ち

宮尾みのり

従業員をマイクロバスで送り迎えする会社は案外多い。ここで一人、あその角で二人と次々乗せていく。パートとバスの組み合わせ、それと「拾われる」の表現で成功している。

鈍感か多忙か虹へ振りむかず

渡辺 南奉

虹を見ると、その瞬間「綺麗だ。し。」と童心にかえったような心境になる。しかし、中には何んの反応も示さぬ人も時折り見かけます。感覚がにぶいのか、または仕事が多忙なのか、毎日の生活に疲れ、潤いを欠いているためかもしれない。

石垣のつぎ目雑草よく見つけ

園山多賀子

石垣の間から、芽を出している雑草を見ても、匂になるところに川柳の面白さと良さ

あります。下五「よく見付け」が生命。

点滴の音込み込ますあばら骨

山本 光男

点滴は大きな音がするわけではないが、静かな病室で一滴ずつ血管へ入っていくのをベッドで見ていくと、瘦せおとろえている体に必み込んでいくように感じる。

末席にはべり冷房ききすぎる

辻 文平

冷房はききすぎると有難くない。鳥肌がたつような冷房のききすぎた末席で、上役につしんで控えている様子をよく捉えている。

シャッターが降りてる煙草屋も日曜

中森葉士人

煙草屋も日曜日には休む店が多くなりました。折角、とことと煙草を買いにきたのに、シャッターが降りていてさっぱり。しかしシャッターの横には自動販売機を取付けている。人が休んでも機械が稼働時代です。

不信感話せば話すほどのり

岩崎 和子

人間関係の難かしさが端的にまよめられていく。お互に腹を割って話せば意志が通じるのが普通ですが、話せば話すほど誤解や曲解され、不信感がつる場合がある。こんなときは焦らず、しばらく時間をかけて、相手は落付いた頃に話すのが最善です。

無趣味のあげく寺参り神参り

小林鯛牙子

人間、齡をとってから無趣味では全く困る。その点、川柳によって楽しく毎日を送っ

ている私達は幸福です。さて、もてあました時間を寺参りや神参りですごすのも良いですが、頭を使わないと老化現象も早いようです。父さんが課長の会社たかが知れ

中谷 利美

小さな会社に勤める課長のお父さんを見る家族の姿がユーモア一杯に描かれている。課長の下には係長と課員が一名ずつという会社もある。たかが知れている会社の課長でも、お父さんは一生懸命に働いていることを、家族はよく知っています。

押入れの整理結局みな残り 松垣若光

押入れを整理した、したがれど人間の欲のためなかなか捨てることができず、最終的には全部残ってしまった。欲というより物を大切にするためと、解釈したい。

真相を知る友話題を変えてくれ

花田たけ志

とことんまで真相を究明すれば、不利になるような話がつづくと、ふと友達が話題を変えてくれた。友情は有難いものである。

家だけで威張れる父に酌いであげ

有働 芳仙

内弁慶の父をいたわる情景が嬉しい。こういう父は案外、涙もろいかもしれない。適量に飲んだところへ友が来る

清水金太郎

楽しみの晩酌もすんで、ゆっくりテレビでも観ようかと思っているところへ、飲み友達が出来て来た。これ以上飲めば二日酔いになるし、奥さんの心配顔もわかるようです。

晦日そば

高橋夕花選

くる年へ希望をつなぐ晦日そば 優
 晦日そば 救世軍は雪の中 どんたく
 晦日そば 家を偲んで旅の宿 雅風
 友の訃を思う今年の晦日そば 悠泉
 ゆく年の思い出す晦日そば 満津子
 駅前に並んで立食う晦日そば 栄
 マンションの一窓ごとに晦日そば 度
 集金に行つてよばれた晦日そば 佳雲
 晦日そば喰べるとこまでこぎつける 木魚
 晦日そばひとりで食べる気になれず 綾女
 子のぶんはラーメンにする晦日そば 佳雲
 集金はもうあきらめた晦日そば 不二
 そろばんが合わないまま晦日そば 芳仙
 晦日そば夢の幕ひく除夜の鐘 凡九郎
 満腹ではあるが一口晦日そば 七面山
 ラーメンでつせと出してくる晦日そば 古方
 除夜の鐘去年と今年をつなぐそば 弘朗
 晦日そば 眼は紅白に向いたまま 寿馬
 晦日そば 娘の嫁ぐ日も決まり 素身郎
 そばの箸とめて晦日の鐘を聞く 虹汀

母さんの振子がとまる晦日そば 渡
 寺々の鐘が鳴る鳴る晦日そば 春日
 晦日そば 出前がとどく夜警室 カズエ
 除夜の鐘聞いてそば屋は息を抜き 代仕男
 晦日そば 去年と同じ碗の数 耕草
 嫁った娘のことなど想い晦日そば 紀美代
 晦日そば 無口な男食べて寝る 岳人
 まあまあのピリオド打つて晦日そば 比呂志
 集金がまだ戻らない晦日そば 秋女
 やつとこさ黒字を出した晦日そば 右近
 そろばんへ一息入れる晦日そば 花子
 晦日そばの温くもり抱いて初詣で どんたく
 晦日そば 外は静かなぼたん雪 道子
 晦日そば 二浪の喉にひっかかり 本蔭棒
 ドンファンが女と食べる晦日そば 酔々
 晦日そば新春のプランも出来ました 里風
 お年玉の準備も出来て晦日そば 岩光
 団地ではもう忘れられた晦日そば 暁明
 晦日そば 憎い仲間と食べている 智子
 十二月三十一日 そば食べる 岳人
 晦日そば 配る娘は初春の髪 宵明
 晦日そば 祖父は由来をひとくさり 方大
 晦日そば 神棚はもう御正月 花子
 住
 カレンダー羊にかえて晦日そば 里風
 晦日そば 食つて一つの句読点 枯梢
 お煮めを睨んで食べる晦日そば 道子
 借金も貸金もなし晦日そば 方大

集金

野田素身郎選

灯台に灯が入り島の晦日そば 酔々
 人
 エプロンに用ためたまま晦日そば 紀美代
 地
 家計簿も黒字で締めて晦日そば 岩光
 天
 一つきりの命へ今年も晦日そば 智子
 軸
 ゆく年へ祈りをこめて晦日そば

寄附金は集金人の顔も立て 多賀子
 集金が駆足となる大晦日 栄
 集金に行つて泣かれたまま帰り 冬花
 集金の足が止った縄のれん 本蔭棒
 集金に来て色事を見てしまい 七面山
 立て込んでゐるのに集金来て坐り 貞祐
 集金と見たかブザーへ声も無し 春日
 円高をボヤいて集金人帰る 弘朗
 集金の行く先々で話題変え 軒太楼
 やんわりと集金延ばす語を拾う 保子
 集金へ師走の風が冷た過ぎ 悠泉

大 萬 川 柳

「ふれあい」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 四百八十六句
入選 六十五句

ふれあいの唇つけ胸に炎えている
和歌山 寿子
参道にふれあう人の目のまろさ
和歌山 公子

片隅に咲きふれあい待つすみれ
岡山 柳子

ふれあいが世代のズレを忘れさす
宝塚 静馬

ふれあいが薄れた頃に来た計報
大阪 公平

蜜蜂の花とふれ合う日も穢き
八尾 鬼遊

ふれあいの日のときめきを胸に秘め
和歌山 紀久子

肩書がとれ心のふれあう友が出来
大阪 蘭

ふれあいても冷たく陸奥は波の上
名古屋 枯梢

虚心なきグラスふれあう音高し
大阪 一栄

ふれあいを求める姑の肩をもみ
大坂 一栄

ふれあつてきれいなバラの棘を知
和歌山 武雄
めぐりあいまだふれあいのある眸
富田林 花梢

ご近所のふれあい大事に丸く生き
大阪 真砂

ふれあいは唇だけとぬかしたり
倉吉 弘朗

ふれあいの好機無口のまた逃し
箕面 一本杉

一枚の葉書ふれあいの道たしか
和歌山 美子

ふれあいの昔を偲んでみる日記
岸和田 千舟

一飯のふれあい野良犬ついでくる
大阪 道子

ふれあいをスキンスリップと大事が
八尾 仲々

ふれあいは汗の臭いのする仲間
倉敷 筒子

ふれあいを大切にする生きぬ仲
倉敷 方大
人妻とのふれあい一線引いている
倉敷 通風

ふれあいが深く噂のたねになり
和歌山 佐代子

病んでから心ふれあう友が出来
三重 冬花

試験管ペビーそんなふれあいだつ
倉敷 里風

ふれあいの言葉で始る朝の露路
八尾 美幸

風にふれ手に触れ頬がふれてくる
大阪 小松園

ふれあいの絆老後をおそれない
米子 千代

久方の慈雨にふれあい鳴くちろり
大阪 貞祐

ふれあいが眠れぬ夜にしてしま
奈良 本蔭棒

ふれあいの席につめたたくるダイ
伊丹 寿馬

金ゆえのふれあいやがて金で切れ
伊丹 寿馬

神様へのふれあい賽銭落ちる音
堺 壽祐

ふれあいを青い果実のままに抱き
鳥取 露杖

ふれあいの絆よじれる愛と罪
鳥取 露杖

ふれあうも他生の縁とからまれる
鳥取 露杖
ふれあいにいつか不倫の灯がとも
藤井寺 吸江

ふれあいの高鳴り別れが怖くなる
和歌山 和子
束の間のふれあいなのに心満つ
和歌山 和子

ふれ合いを重ね不仲の溝を埋め
平田 代仕男

ふれあいのこころは寡言でも通じ
大阪 幸子

石仏にふれあひもとめ続く旅
大阪 幸子

木洩れ陽のようなふれあひ胸に抱
大阪 幸子

ふれあいを女忘れるとき墮ちる
大阪 幸子

ふれあいがしめつた火柴抱いてい
寶屋川 度

空白のページにふれあひ伏せてある
神戸 どんたく

うたかたのふれあひ抱いたままに
神戸 どんたく

老い
神戸 どんたく

酌み交わす下座でふれあひ温める
鳥取 静泉

旅情とのふれあひ踊りの輪に入り
鳥取 静泉

ふれあいを探す厚化粧かも知れず
鳥取 静泉

ふれあいが欲しい施設の白い壁
鳥取 静泉

恵まれぬ同士ふれあうものがある
鳥取 静泉
自然とのふれあひがあり過疎に住
倉敷 素身郎
慰問団ふれあう心置いて去に
倉敷 素身郎
遍路道心ふれあう友が出来
岡山 凡大郎
独酌へ見知らぬ人が酌いでくれ
岡山 凡大郎

やすらぎは神とふれあう鈴の音
和歌山 公子
触れあひは朝のコーヒで知る家庭
和歌山 公子

和歌山 富子
ご先祖とふれあう灯りの中に座し

大阪 公平

親と子のふれあい涙の鞭もあり

堺 一三三

コンクリートの壁ふれあい拒絶す

奈良 本蔭棒

人ノ句

ふれあいの或るひと言を待つ女

堺 天笑

地ノ句

神さまとふれあう胎動いま覚え

岡山 柳子

天ノ句

天地とふれあう新米炊き上り

豊屋川 恵美子

選者吟

一期一会 明日のことは考えず

昭和五十三年度

ベストテン (十月現在)

一 花梢 一八〇 富田林

二 千代 一七六 米子

三 幸祐 一七五 和歌山

四 憲祐 一五〇 堺

五 武雄 一四〇 和歌山

六 和子 一四〇 和歌山

七 好一 一四〇 大阪

八 一二三

九 筒子

一〇 百酒

一一 凡太郎

一二 惠美子

一三 素身郎

一四 静泉

一五 どんたく

一六 露杖

一七 静馬

一八 美幸

一九 里風

二〇 方大

二一 吸江

二三 五堺

二四 倉敷

二五 西宮

二六 岡山

二七 豊屋川

二八 倉敷

二九 鳥取

三〇 神戸

三一 鳥取

三二 五島

三三 宝塚

三四 八尾

三五 倉敷

三六 倉敷

三七 藤井寺

二二 本蔭棒

九〇 奈良

以下略

昭和五十四年度第一回

「開幕」三句以内

締切 十二月二十五日

第二回

「これから」三句以内

締切 一月二十五日

投句先

〒533 堺市堀上緑町一―三十七

藤井一二三方

大萬川柳係

川柳わかやま百号

句集「あおい海」

刊行記念大会

日時 昭和53年12月10日(日) 12時30分
場所 新和歌浦観光ホテル「萬波楼」

南海市駅前、国鉄和歌山駅前からバス、新和歌浦下車徒歩約五分

祝辞 川柳塔社副理事長
宿題 「百」

「太」

「波」

「茂る」

「寿」

席題 当日二題発表

藤村メ女、高橋幸代選

以上各題三句吐。締切13時30分

(投句拝辞)

会費 5,000円(当日句報、酒食)
呈賞 各題秀句に呈賞
忘年懇親宴

主催 川柳わかやま吟社
協賛 川柳しんぐう吟社

川柳わかやまも遂に百号に到達。本年最後の大会です。新和歌浦の海を眺めながら、師走の一日を、楽しんで下さい。

皆さんの御参加をお待ちしております。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

彩郎氏が形水氏の句集「谷町」にペンを執っておられる。一ページ全部へ形水氏のことばかりである。次号には薫風さんがグラビアへ登場される。

▼荻原スエ句文集「渚」が、日川協事務局長大井正夫氏の編集で刊行。限定六百部、非売品とある。句は著者、文は著名柳人多数という異色句集、B6版二八六ページ、美本。

▼大井正夫氏は過労から病床におられたが11月にいただいたお便りでは、ほとんど元氣になられた由。有能の働き手ばかりを柳界は酷使すぎるようである。

▼第二九集「吉備団子」の原稿募集。自選10句へ参加費千円。締切十二月十日厳守。原稿送り先〒701-42岡山県邑久郡邑久町山手一四四五―川柳岡山社内吉備団子編集係あて。

▼川柳年鑑一九七八年版が雄山閣から刊行。「座談会

・句会の意義について」へ大阪から森中恵美子さんが出席されている。川柳年鑑作品募集―一人三句、題材は自由、受付期間は毎年九月末日―送り先は〒102千代田区富士見二一六一九雄山閣出版編集部川柳年鑑。本号の定価・一八〇〇円。

★岐阜川柳社創立二十五周年「柳宴三〇〇号刊行並びに菊花石二万句集発刊記念川柳大会が54年3月11日に岐阜市神田町四丁目・日の丸会館(3階大ホール)で開催される。兼題―名刺・加藤一星選―梅・酒井路也選―ネクタイ・逸見監治選―脇役・曾根幸広選―化粧川鮮山選―チラシ・青木史呂選―哺乳瓶・森繁苑狂選―ドライブイン・片岡つとむ選―色紙・岸田万彩郎選・事前投句「妻」野口北羊選・投句拝辞。会費千円、宿泊朝食つき三五〇〇円

▼時の川柳10月号は、三条東洋樹主幹の「神戸市文化賞受賞記念号」として発行。「主幹の文化賞をたたえて」の祝文が堂々13ページを飾る。

▼総合雑誌「川柳」十一月号の「東西南北」へ岸田万

何を選んでいただくかは先様におねがいして

タカシマヤの商品券を

お贈りするのにも心に

くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



高島屋
大阪・東京・京都

(祝賀懇親宴三千円・事前申込制)主権・岐阜川柳社。なお同誌には毎号東野大八氏執筆。

▼東野大八氏の住居番号変更―〒505美濃加茂市深田町二丁目二番三十一号。(電話05742・6・1734番)

▼金子吞風氏(上田市)立派な句集「谷町」―私も句集をすすめています。仲々思うようにはいきませぬ。大正四年以後の句帖が約四十冊、ただ虫に食われるばかりです。

▼第六回西日本国鉄川柳人名古屋大会が1月28日10時から名古屋市内「美よし観光旅館」で開催。本社から萬的氏が「にらむ」照路氏が「ターミナル」の兼題の選をされる。

▼奥田新吾氏(番傘)の句集「大都会」―作品集―の出版記念句会が九月二四日「豊中文化振興会館」で開催された。本社から薫風、

寿馬、酔々、凡九郎、鬼遊
氏ほか出席。一人間座新書
⑧頒価三五〇円 下六〇円 下
546 大阪市東住吉区桑津
町六一五九中野アキオ方
▼藤村涼子さん（ニューヨ
ーク）から米春（ニューヨ
ーク）から来春（二月）に帰
国することになりました。
勤務先きは住金東京本社で
すが、元の本社へ帰社する
わけですと。

▽同人の動向△
▼八木摩太郎氏（堺市）か
ら「古都堺、新しく躍動す
る堺の姿を「えほんの堺」
と題して堺の広文社から出
版。大仙公園の私の句碑も
載るとのこと。堺まつりは
百五名の盛会でした。一問
題になった「人の物」の句
は誤記してありません。
▼西川洋々氏（鳥取市）か
ら「はじめて「国鉄川柳」

の事務局を担当し、編集の
むすかしさが痛いほど身に
しみました。なお「高血圧
予防標語」に入選（賞金五
万円）し、表彰式のニュー
オオタニで不二田さんのお
うわさを標語人からうかが
いましたと。

▼大江秋月氏（兵庫県）か
ら「今年八月十日で還暦を
迎えました。四月に長男結
婚、九月には二女が初産で
男児を得、厄年のはずが
めでたつづきによるこんで
います。

▼小西雄々氏（鳥取市）か
ら「十一月五日は長男淳一
氏の結婚式で何かと忙しい
日がつづいていきます。

▼東大阪市文化祭川柳大会
では岩本雀踊子、玉置重
人、大路美幸諸氏が秀句賞
を獲得。

▼椋谷寿馬氏（伊丹市）は
「川柳塔勉強室」第五号」
を発行。本誌第三雑詠の
「愛染帖」愛好者の集いな
どが強調されている。下6
64 兵庫県伊丹市西野外川
原一七〇椋谷寿馬。

▼河野君子さん（大阪市）
の令息が10月に結婚され、
めでたいお忙しがつづいて
いる。

▼有信新之助氏（大阪市）
から「近くの銭湯が次々マ
ンションに变身。やむなく
車を処分してガレージをフ
ロにしましたが、脱衣場が

新 同 人 紹 介

らん

らん

好郎・文秋・推薦

川柳塔社 同人句集 価送 1,500 200

川柳塔社 同人バッジ 価 (送料共) 1,100

バックナンバー お問合わせください

たのしさひろがるお買物



阪急

大阪急行電鉄株式会社
大阪急行電鉄株式会社
大阪急行電鉄株式会社
大阪急行電鉄株式会社
大阪急行電鉄株式会社

なくテンヤワナンヤですと。
▽旅 信△
▼八木千代さん（米子市）
がニューヨークからブロー
ドウェイで「王様と私」と
いうミュージカルを観まし
たが、その豪華さに驚まし
た。アメリカ人は親切な
人が多いようです。
▼正本水客、黒川紫香両氏
から北海道便り「湖底湖の
怖えにも似て水が澄みー水
客。ー海岸の起伏に砕け浪
白きー紫香。
▽12月の句会△
▼南大阪川柳会は20日午後
6時から松崎町大萬で開
催。題は「不覚・隣り・民
宿・とまり木」
▼南海電鉄川柳会は21日午
後6時から南海電鉄本社食
堂内で開催。題は「優先座
席・粘り勝ち・有頂天」
▼東大阪川柳同好会は22日
6時から東大阪市中央公民
館2Fで開催。題は「舞台
・温い・辻褄・首（席題当
日一題発表）
★
▼本年は12月29日に締切り
ます。締切り後到着分は三
月号に発表します。

馬鹿になる妻が釣り合いつている 美幸
釣り合いのとれる老舗の娘を貰い 潮花

兼題「樽」

正本 水客選

樽叩く唄を聞いてるお月さん どんたく
大世帯味噌も醤油も樽で買ひ 一栄
北斎の樽の底から仰ぐ富士 鬼遊
叩いたら八木節飛び出す樽もある あいき
軋がした樽から野良犬首を出す 度
樽酒のほてりだけではない女中 柳信

昭和53年大阪文化祭

第30回 川柳大会

席題「大阪弁」

西田 柳宏子選

北浜の雀大阪弁で鳴き 秀歌子
大阪弁さよかきよかと聞いていず 蟻朗
大阪弁よからんが立ってくる 鬼遊
喧嘩にはならぬ大阪弁で勝ち 銀糸
席題「自衛」 柏原 幻四郎選
弱気かな自衛のための千日手 いさむ
堕ちそうなおんなが粘る糸を持ち 良子
これも自衛の百科事典を子に残す 冬二
おじぎ草きつと自衛の意志を持つ 定男
席題「屋根」 森中 恵美子選
一人来る一人が帰る秋の屋根 冬二
嘘つきの積み木屋根から崩れ出す 勝
騙してもだましてもある低い屋根 美巳代

葎屋根の雫も受けて樽朽ちず
樽乗りのピエロの涙見てしまふ
道頓堀寛美が鏡を抜いて春
樽つくりお父にふるき木の香り
笹綱が小さな樽に詰めてある
四斗樽今日とんぼりへ来て坐り
樽の籠編む竹の先のたをうち
故郷見るボーズで象は樽のうえ
樽つくる父の膝から冬になる
樽底で酒しみたれた音をたて

席題「和服」

北川 あきら選

秀 振り袖のわが娘だれにもやるものか 吉甫
佳 美しく老いて和服でしか逢わず 東照
佳 帯きつく締めていくさの貌になる 湖風
佳 火の彩が好き女女の着る和服 醉々
兼題「鰯」 橋高 薫風選
秀 あれも些事これも些事鰯身じろがず 幻四郎
佳 アマゾンの血は失わず冬の鰯 寿馬
佳 定年を鰯に喰われた夢を見た 美佐
佳 ワニの棲む川でも渡る商社マン 一九
兼題「近頃のニュースから」 松谷政俊選
秀 試験管受胎告知が透いて見え 朋義
佳 ヤクルトの例あり妻に勧められ 一本杉
佳 園田さんにまだ節さんの手の温み 東照
佳 歯科医大口を開ければ皆虫歯 古啓
兼題「息子」 磯野 いさむ選
秀 ぱっくり寺へ詣る息子の運転で 幻四郎
佳 靖国の息子よ母はもう来れぬ 湖風

紫香 英子 吸江 アキラ みずほ 与史 栞生 好美 一幸

梅の里梅干し漬ける樽黒し
漬物樽に亡母はひっそり居てくれる
酒樽に父のいくさが詰めてある
風花に酒樽並ぶ町をすき
若者に帰れと樽を叩きこむ
仕込樽冬の来るのを待つばかり
樽一つ軋がすことのむつかしさ
鏡蓋抜くとき嘘を守り抜く
(河井庸佑・整理)

兼題「マニヤ」

永田 帆船選

佳 叛くかも知れぬ息子を肩に乗せ 美幸
佳 米朝を父と一緒に聞く息子 恭太
兼題「川」 谷口 光穂選
秀 母を流す男を流す秋の川 恵美子
佳 水乞いの唄から瘦せる母なる川 恵美子
佳 この川の温さに負ける人ごろし 美巳代
佳 おんなの川に果てない業の火が走る 良子
兼題「マニヤ」 永田 帆船選
秀 せせらぎへ魚をもとず釣マニヤ 貴志
佳 学説を市井のマニヤくつがえし 古啓
佳 レンズ覗いて流星に乗っている 寿馬
佳 マニヤには石も冷たい物でなし 右近
兼題「友情」 大路 寿幸選
秀 友情のどかぬ沼で亡母に逢う 寿界
佳 友情をてのひらに乗せふと吹く 翠公
佳 友情を示す尻尾は千切れそう 柳宏子
佳 友だちが寄ってたかって極出る 鬼遊

古方 武雄 栞子 定男 智子 与史 水客

出席者百二十六名。



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣 史好報

酔うまでを酌いで正体見る女将
 一輪の菊は気合で咲くごとし
 正体は道化師だったデスマスク
 れんこんの穴・気まぐれでないだろう
 正体を知っているから笑つとく
 正体は何であろうと掌を合せ
 気まぐれの墓参水が温うなる
 気合さめて見れば路傍の石であり
 差しむかい姑が気合を入れて来る
 気まぐれのように夫が風呂を焚き
 正体を現わした時幕が降り
 頭陀袋の秘密を入れておく
 抱いでいるお前の正体さえ知らず
 気まぐれに歩けば方角などはない
 気合かけたが鳩つばいに飛び出さず
 善人の正体見せたのど仏
 一枚を剥げば正体相似たり
 秘密持てぬ男でもらす独り言
 美しい蝶の正体知らぬ花
 恋の花気まぐれでよい咲いてくれ

重サ雅惠 鎮 飜 美 岳 小 吸 一 真 弥 凡 好 鬼 醉 薫 憲 祐
 夫 ヨ 風 美 子 彦 太 美 幸 人 松 江 二 三 砂 生 子 郎 遊 ヲ 風 祐

川柳たけはら 森井 菁居報
 ぬかみの味もしみこむペンでよし
 イヤリング甘い言葉にゆれている
 サンガラスはずそう八時十五分
 さみしくも借家住まいに本が増え
 風雪に耐え抜く石の面積え
 丁寧な言葉で嘘が喋られる
 意地張つて見ても所詮は女です
 干しエビをむきむき夫婦で飲むビール
 もぐつたら海のひみつがつかめそう
 行きずりの人情磯に行つごとし
 ふるさとの夢は亡父も亡母もいる
 去るも亦来るも運命浅からじ
 柳の幻想夢二の女が佇つ臉
 つかの間の夏をくま蟬鳴き止まず
 悲恋ひとつ風に追いつめられていく
 父とするはさみ将棋が童話めく
 ひまわりの炎暑に挑む顔が好き
 ネマトーダー土地のかわきに受け答え
 犬となら六十グラントドまだ走れ
 夏休みあんがいてレビ見られない
 やけつばちを母は静かに見てくれる
 川柳後楽(岡山市) 井上 柳五郎報
 地下街を軽い財布が通り抜け
 地下街を歩いただけでよう買わず
 当てがないから地下街へ足が向き
 地下街で美人に見えた日の不運
 地下街で落した拾円よく響き
 地下街で旅の土産を間に合わせ
 回り道に女涙をおいて来る
 回り道やつと握つた主導権
 正 孝 昌 博 佐 幽 定 幽 幽 幽
 道 柳 吾 友 加 志 谷 平 谷 谷 谷

裏口を知らぬ出世の回り道
 タクシーは正直メータ回り道
 急いでもどうにもならぬ回り道
 回り道老いた女房に頭さげ
 花火に似る余生過去の彩を追い
 プライドだけの余生で寂しすぎ
 老醜を隠し余生たじろかず
 余生は我を通す相手がある果報
 寿命伸び余生が先へ逃げが行き
 ヒーローの余生作家のペンが決め
 冗談へ明治はあさんむきになり
 回復期冗談も出てはつとする
 冗談に沸かしたお茶で大火傷
 冗談と言つて許せぬ事もある
 南大阪川柳会 中川 滋雀報
 父ちゃん歴史を語るちびた靴
 勝つた方の歴史が正史として残り
 裏面史にうちた女の影法師
 ビジネスに徹し素顔のない女
 ビジネスの何分の一かに悪を秘め
 ビジネスと思いきやタイ締めている
 ビジネスで笑えばえくぼも浅くなる
 円くゆく要領妻に巻かれとき
 つり革で寝る要領の悪い奴
 要領は悪いが正直さを買われ
 急ぐ金が足元は見せまいぞ
 急がねばとうのたつ娘が二人いる
 乗り物の中で急いでいる心
 散り急ぐ花の心を読みきれず
 とときめの彼が待つてる急ぎ足
 御自分の言葉で自分を殺してる
 凡 久 蘭 綾 憲 文 万 鎮 喜 好 智 小 好 雀 弘 度 中 滋
 九 子 女 祐 秋 里 彦 風 一 子 松 園 郎 郎 生 生 雀 雀 雀
 郎 子 女 祐 秋 里 彦 風 一 子 松 園 郎 郎 生 生 雀 雀 雀

みくびつた波にオールをさらわれる
石投げてくらげの平和と乱す波
片方の耳は言い訳信じてず

倉吉打吹川柳会

奥谷

弘明報

懐手失敗そこにあるように
百度石願いの重み耐えている
錦絵の皿は真綿に包まれる

伊子

旧婚の旅行は妻がリードする
川柳さきやま

河原みのる報

三次会大風呂敷敷てしま
官僚の面子スモンを控訴する

東の間の恋にも似たり虹の橋
身を投げた波紋静かに消えてゆき

送り火の煙にかくした泪あと
卒直に物言う性で損もする

月下美人今夜咲きます招待状
熱球に一喜一憂甲子園

条約へソ連がすねて出た波紋
お日様が遠足の子をはずませる

来る孫に祖母年金みな取られ
娘の電話はずむ話に気ももめる

シナリオの中に私も居るドラマ
カンナ咲く女心を炎やさせて

勘忍の緒を切るまでと知る我慢
二階から覗かれてる覗く腰

コネ一つ待てば条件消えていた
嫁姑我慢をすれば胸が燃え

女房にはずむ気持をおさえられ

西宮北口句会

灰皿へ不調のタバコ押しつける
欠け皿が所事の苦勞知っている

風疹へ母に見えぬ風があり
故里は心の曼珠沙華

大男心優しい字を書けり
ティールーム私一人のコーヒ飲む

北風にゆられ柵車のあとを追う

形水

入仙

好郎

舎人

宗則

登美也

陳者

千重子

紫泉

俊一子

民水

とめ子

形水

入仙

好郎

舎人

宗則

登美也

陳者

千重子

紫泉

俊一子

民水

とめ子

御前

香雲

自然

早苗

一保

柳風

豊生

きくの

弘朗

千世子報

半歩

千世子

喜甲

婦美子

薫風

喜久甫

総甫

懐手失敗そこにあるように
百度石願いの重み耐えている
錦絵の皿は真綿に包まれる

割勘でちよぼちよぼ同士飲むうまさ
懐しい妬心が老いに湧いてくる

喜劇より悲劇好きです孤独です
網戸からひんやり秋の風がしむ

性解放石工は水子地藏彫る
明け放つ喪の家小さく風抜ける

心にも色があつたらそれは真紅
思い出しは心の奥に片思い

灰皿をよこして父が家に居る

いずも川柳会

繁昌のとびらのキーは客が持つ
繁昌の御札に建てた大鳥居

繁昌を祝うダルマの大きな眼
わがままが寄り添うてゆく老いの坂

老人のわがまま一人過疎に住む
嫌な過去互に伏せて老夫婦

夫婦かと思ふ燕が秋を去に
ドライパーも梨の味覚を買うて去に

薬局が繁昌している流行風邪
休業の貼紙夫婦の小さい旅

わがままの言える夫婦で共白髪
義理人情明治の胸に重く生き

いさかいが汗の積み重ね
繁昌は男の汗の積み重ね

重い口やと割らせて議決する
夫婦とはこんなものかと二十年

繁昌の秘伝をきかすくし味
障子貼る四隅へ夫婦気が揃い

板垣

草丘報

夢酔

正朗

栄子

芳子

秀子

みのる

早苗

きみえ

可保留

河南

多賀子

伊子

美代子

正祐

静馬

寿馬

紅扇

笑女

ろ山

めぐる

政甫

八州

ベ女

草丘報

夢酔

正朗

栄子

芳子

秀子

みのる

早苗

きみえ

可保留

河南

多賀子

孝太郎

軒太楼

虎秋

代仕男

草丘

三和

過去帳で消えた行方をまだ探し
ハイジャック行方を指定した恐怖

釘を刺す母は行方を知っている
谷水の進む希望に洋が待ち

大自然の輪廻に托す秋の虫
王手飛車一服吸った煙草の輪

採み潰すウップン喫いさし短かすぎ
犯人は一本吸って口を割り

一命を恩賜の煙草と引き替える
金のいる話になった後ずさり

先に来て涼しい顔して待つ彼奴
故郷捨てた意地後ずさりなど出来ず

後ずさりしても白旗に手を出さぬ
打ち水のまあ涼しそう客の声

涼風に娘の式へ晴着縫う

京都塔の会

松川

杜的報

来年の夏服と云う祖母違者
神の鈴へ届いてはねた竹とんぼ

釣れるかと問えばだまって場所をかえ
成仏をしいやと釣竿からはずし

チョッピリと自分いつわる日の日記
日銭追う男に思想などはない

捨て犬の眼が一番怖いほど
信心の人に混って坂のぼる

どんくさい奴や役職喰い違い
行届く段ど自宅まで送り

慰霊祭へ家族して折る羽羽鶴
見え透いた暗示女将はよく笑い

勉強が出来る暗示へ乗って来ず

緑之助

ひか平

百合子

文平

無聖

可住

越山

みよる

素水

宗珠

ひとえ

近江

千代子

貞峰

秀子

テル

芳子

紫香

潮花

美穂

明代

誠史

水客

白溪子

客遊子

杜的

萬的

飛鳥

杜的

萬的

トンプクを暗示で飲ます葉包紙
弱い気が暗示にかかりみな取られ
天目の九谷へ和尚は膝を崩さない

大田川柳会

藤田軒太楼報

会心の笑み焼物の肌を愛で
笑う日を夢見て巢立つ母子家庭
さりげなく笑って姑をかわず嫁
笑うなら笑えと腹を据えている
閑職の役で飼つとく生字引
台本のない脇役を妻がする
ネグリッシュも脱ぐ気構えに役がつき
迷惑を計る鐘りが狂つてい
昼寝どき迷惑よそこに宣伝カー
迷惑なデマ大臣もお手をあげ
半畳が入って迷惑する話
形式と本音がもめる遺産分け
内容はどうあれ形の良さに惚れ
それぞれに思惑があつて形見わけ
もう夫婦交わす盃形だけ
形容の巧みな舌に巻き込まれ
迷惑な話善意で進められ

近詠

鈴木可香

夫婦でも一線をひく金のこと
決定権議長ゆつくり立ち上り
男世帯の今日がはじまる茶を沸かし
仏壇の豪華へ在りし日のくらし
小便小僧の下へ緋鯉が寄ってくる

耕三 佳似子 求芽
みのる 三二男 水煙
芳子 軒太楼 九二老
青湖 立雲 義雄
雷音坊 可保留 虎秋
孝太郎 緑之助 独仙
正朗

川柳わかやま

津田

与史報

逃げ道を探すと里に向いた足
背に土をつけて散歩の娘が帰る
華燭の典母の祈りは果てしなく
真直ぐに歩いて逃げ道考えず
妻の掌中で逃げ道さがして
散歩道若いトレパンかけぬける
白無垢の下には愛の華燭燃え
お目当ての花が咲いてる散歩道
胸深く住んで私に遠い人
逃げ道へ履く晩履など売つてない
華燭の典今日しみじみと親の愛
逃げ道を通り止にした税吏
懐をはたいて見栄の華燭の宴
二人だけで神に誓うも華燭の典
散歩道挨拶交わす同じ年令
万一幹事は逃げ道おしえとき
逃げ道をさきぎりに行く人生譜
懐へ飛び込む逃げ道だつてある
逃げ道はぶらり手土産さげている

川柳高知

川竹

松風報

三食に昼寝もつけて嫁貰い
珍らしい母の昼寝も不安がり
ふるりの道に馴染めぬハイヒール
母さんの誇り和我の腕がさえ
真直に歩き誇りを失わず
恋人が息子を変えおそろしさ
グサリ刺す言葉お酒の力かも
首吊りでよし九十の服を選り
星と歩き風と話して象の旅

善彦 十郎 富子 としよ 紀久子 勇太 すみ子 弘生 佐知子 裕美 好女 誠一 寿美数 のぼる 三十四 寿子 正博 一義

大声で穴から呼べば穴の声
死神が岬のどこかに棲んでいる
少年の夏の匂いが駆けてゆく
七人の敵に真向う身だしなみ
これからは儲け平均寿命こす
袖とおす甚平夫の幼かり
思い出を残す陛下の青喜ヶ峰
川柳塔まつえ句会
証言台忘れることの価値を知る
忘れよう男の涙凍る刻
公約をぼつぼつ忘れかけ初め
忘却はできぬ恨みのキノコ雲
祝日の砂丘らくだも疲れ果て
忘れるに時間がかかる別れする
紅生差招かれて行った秋祭り
過去の罪忘れて明日の貌となる
柿うれて子が客で来る祭笛
秋祭り太鼓は冬の鼓動かも
祭りから祭りへピエロに故郷はない
戦争を忘れた頃に有事故

川柳しんぐろ

川上

大輪報

遊んでる時本当の顔になる
遊び好きたに似てきた子の怖さ
ほんのお遊びでは済まぬのも女
献血の針夏やせをいたわらず
夏やせという事にしてやせている
夏やせも同じ位の夫婦仲
夏やせへ父の軽い弁当箱
出張の宿で左遷の夢を見る
出張へそわそわ目的別に持つ

紅雨 松風 美和子 節子 古城 海江 紀州人 紅童 愚童 虎秋 早苗 巡歩 舞美也 登吉 みるこ みのる 緑之助 通児 孤呂二 町紅

出張の手当を待つてゐる家計
出張の宿では妻子のない顔で
出張の夫の電話優しすぎ

過疎に住み出張の日を待ちわびる
コーヒーに素直についてくる女

バーゲンでコーヒー代を浮かす妻
冷え切ったコーヒー別れの味がする

通ぶったブラック苦い悔残し
子育てへ夏やせを見る他人の目

出張へ子と添い寝して朝を待つ
南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻

概算金渡しして故郷へも寄れと云う
概算は飲む量だけが違つて来

マイホーム概算をして止めにする
夢でも概算嬉しいマイホーム

酒のみに概算大きく狂わされ
大体の概算をして内祝

概算はけずる事から手をつける
概算で国鉄赤字の仕事ぶり

高うつきまっせと概算見積られ
概算を笑つて見てるコンピュター

概算を説明せよと言う野党
堺川柳会

まあまあと田満く治めて金が要り
診断のまあまあですに増す不安

まあまあ縁と夫婦とも思ひ
退屈をしない程度の客の入り

人件費かさみますます物価高
田が売れてブロック塀を高く積む

より高い理想をえがくボールペン
育園

十郎
幸としよ

喜佐司

与呂志

希久志

寿子

はじむ

まさ子

とよ子

圭水報

摩天郎

宏子

水子

雅風

綾女

正和

柳信

勝美

誓二

朝子

与一

藤井二三報

幸子

弘生

笑痴

川狂子

正和

育園

箱入りの娘につく美男虫にされ
子のおしりつついて点取り虫にする
屋上に値札のついた虫が鳴く

名も知らぬ虫と寝ていた山の家
虫好かん同士であくび噛みころし

惜しうない年まで生きる鞭を振る
名を惜しむ人で政治に遠く住み

愚痴だけが惜しい女にしてしまい
惜しまれてメダルにもなり札になり

ぬれ衣へはたがやきもきする無口
子を守る母は無口になつとれず

器量よしお高くとまり嫁き遅れ
東京が無口にさせた国訛り

うみなり川柳会

大塚

近視の損めがね外せばみな美人
お隣りへ郷里の梨の味も見せ

闇の夜に荒れる波止場が舟の音
恋もせず只ひたすらに梨を売る

四等親の結婚理性がゆるさない
御先祖に済まぬ聖書を愛読し

ほめられて予算以外の梨送る
先祖は無い分相応にマイペース

近道の名出して信用やつとされ
杉植えた先祖に見せたい杉木立

日の丸の手旗が殿下をま近かにし
梨の荷へ母の香りもせて着き

何も彼も知つてるだけに気をつけ
御先祖のつるにカボチャでぶらさが

心配は心配ひとます茶をすすめ
心配は女難の相を子に継がれ

保護色を活かす虫さえ生きる道

与一
清女

小松園

草春

天笑

邦晴

宏子

摩天郎

つき子

千乃子

東雲

一二三

豊生報

一貞

行子

とみ枝

富美湖

吟月

盛桜

希満子

舟宏

純平

笑王

保子

とし江

無人

葉士人

豊生

洋々

救急車近く止つた夜の寒さ
珍客に幸い豆腐屋が近し
和歌山七面句会

美しき嘘の口元見つめいる
二階にも音楽好きの友が居て

お犬様でいらして恋もままならず
のら犬のらしからぬ芸に見せる

お決まりの嘘をソファーで聞かされる
嘘つけぬ夫でムードも無い生活

一人旅古き家並の中二階
犬神の伝説残る里の秋

嘘平気つけるおかみで愛想良く
野良犬はさわがれもせず六ツ子生み

夕暮れを犬に別かれたお堀端
お二階に二人の幸が多過ぎる

円満は夫婦でたまには嘘を云う
新築の二階で見せる海広し

新婚の二階の灯もう消えて
帰つて来て犬の頭を先になせ

嘘は駄目云わねばならぬ身の辛さ
三井ヶ丘川柳会

異人館は坂のなかば庭に矢車の花
蝶の行列ビルの持ち場へ散つてゆく

どら息子なりの人生縮図あり
しようしようと吹く風白しいわし雲

童顔へ匂いをこぼす沈丁花
満たされぬ心が小さな不足言う

雨雲は琵琶湖の空をさけてゆき
名月が十一階の窓染める

秋風におんどり声を正しゅうし
宝恵駕の列の男はアホに見え

由多香
日満

淳子

隆恵

晶子

フクコ

三幸

富子

周穂

わか

勇次

輝夫

世津

知也

昌三郎

光治

秀市

英雄

博泉報

浄平

好彦

好子

洋茶

一枝

江留美

三郎

吟風

よしひろ
翠公

・募 集・

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 正本 水客 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「贈り物」 津田 与史 選
 「雪女」 堀江 正朗 選
 「立春」 川竹 松風 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 正本 水客 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「雛段」 高橋 幸代 選
 「陽光」 川端 柳子 選
 「女」 太田 良子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

常任理事会は12月4日 5時から

定価 四百円 (送料29円)
 半年分 二千五百円 (送料共)
 一年分 四千八百円 (送料共)

昭和五十三年十一月二十五日印刷
 昭和五十三年十二月一日発行

大阪府南区巖谷中之町二〇番通
 編集兼 中島 蓬太郎
 発行人 藤原 童心社
 印刷所 藤原 童心社
 郵便番号 542

大阪府南区巖谷中之町〇番地
 発行所 川柳塔社
 電話 大阪・二七一三九八五番
 振替口座 大阪・三三三六八番

本社十二月句会

日時 十二月七日(木) 午後六時
 会場 金属会館
 兼題 「雑談」 「柳話」
 「停電」 「技巧」 「物心」
 高杉 鬼遊 選
 児島 与呂志 選
 阿萬 萬的 選
 菊沢 小松園 選
 黒川 紫香 (今月の出題・香川静之)

★投句だけの方は切手百円封入

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区巖谷中之町20
 川柳塔社

1月の兼題 「丘(岡)」 「気合い」
 「未(みつじ)」 「屠蘇」

兼題「雑唱」は「雑談」と変更

本社句会

1月8日(月) 6時 から
 2月7日(水) 6時 //
 3月7日(水) 6時 //
 4月6日(金) 6時 //
 5月7日(月) 6時 //
 6月7日(木) 6時 //

常任理事会

12月4日(月) 5時~7時
 2月2日(金) 5時 //
 3月2日(金) 5時 //
 4月4日(水) 5時 //
 5月4日(金) 5時 //

★今日の時点では、まだ12月号の出来が、あゝ、操子さんの句集「千亀利」の仕上がりも見ていないが、とにかく「さよなら53」の後記にまでコギつけた。

辛抱

★改題創刊号の年と41年版を合併したのからかぞえてみると、合本が十三冊、本棚にずしりとならんでいる。ひと口に云って十三年間だが、その年、その一

カッケー 肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミン[®]A

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほか5ミリ錠



冊にドラマがあった。これからもドラマはくり返されるであろうが、個性のそれぞれ違った人たちが寄りかたまっているのだから、編集一つにしても、全部の人に満足してもらえないのはやむを得ないと思っ

▼葉子コーナー

▼十二月と云えば忠臣蔵いま上映中の深作欣二監督の「赤穂城断絶」では浅野長矩の切腹場が見せ場、家来への思いやりを強調していました。

▼赤穂義士の法要が十四日三十三間堂前、法住寺で営まれます。四十七士の遺髪塔をまつる瑞光院、大石良雄閑居の旧跡で遺髪塚がある岩屋寺など、私の好きな京都には義士ゆかりの社寺が多いのです。

▼五十四年の抱負の一つに義士魂を持ちたいと思っています。

いた。愚妻が近所の先生にお願いしたことが「いつも手遅れだよ」とお叱りをうけた。とにかく人間すわれないと三度の食事が第一うまくない。それに読書なら二、三時間ぐらいなら、腹ばらなくてもさほど苦痛は感じないが、ここの校正となると一字一字追っていくのだから、三枚もやれば、からだをささえている腕は痛むし、胸にあてた枕のため胸は苦しくなるから背筋をのばして休む時間のほうが

長い。そのうちに不自然な体位で赤ペンをにぎっていくので、こんどは右の目の血管を切ってしまった。さ

いよいよ初校で二度校正してあるので、誤植至るところにあり。とまでは怒られずにすむかも知れないが、正に死闘の11月号だった。

★ご近所の小出智子さんに

助っ人を乞うた。河野君子さんは令息のおめでたで上京中のため智子さん一人に迷惑をかけてしまった。六枚のゼラへいちいち指で押えて原稿とにらめっここの丸一日だったと思うが、やはり十字ほど洩れがあった。

「完べきだと思いましたが、前号にも書いたように、原稿通りでは完べきにならないのである。

「これでは誤植追放は絶対ムリですわね」と、たとえ一人でも、誤植の理解者があったことに、ここのオジリや目の苦難はムダではなかったようである。とにかくえらい「メ」にあったが「そんなこと」「シリ」ませんと、と云われりや、それまでの話。

ジングルベル

★10月21日の秋田先生の一周年忌には、ベニシリンとマインで、一時間ほど立てるようにしてもらい、とにかく墓前へお詣りしたが、10月27日の先生の出版記念の会には、欠席してしまっ

た。正に不肖の弟子ではある。

★一昨年までは、大みそかの夜は秋田先生のお伴をして、心斎橋筋を行きつ戻りつしたものである。夕食はハママラ（広東料理）がほとんどで、コーヒーはモンブラン、みそそばは家族亭、そして天王寺駅まで車で

で送っていただいた。ジングルベルと雑踏の街、というよりも大みそかの商都大阪の街を愛されたのであろうか、時にはパチンコ屋へもはいられた。勝負には強く、かならずお孫さんのみやげが出来た。

★本もよく買っていたのだが、帰りの車の中で、その年の句集をお手伝いしたことを「今年はいえ仕事をしたね」と、いつもそういつてくださる。本年など、「谷町」と「千亀利」のお手伝いをしたので、ご在世なら、なんといつてくださったであろうか。

★秋田先生が歩かれるときは、ガンと極端に右肩を下げられる。そのあとにはくらが従うのだが、ジングルベルと先生の思い出は永遠であろう。

頑張った一年

★大物級の句集二つもお手伝いして悔いはない。これほど多くの花道が出来たとおもう。ほんとうにありがたい年だった。

皆様もよいお年をどうぞ
★ご健康と柳運を祈りあげます。(不二田一三夫)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和五十三年十一月二十五日印刷
 昭和五十三年七月二十一日発行(毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻六八九号 川柳塔

十二月号

タッチでえらべば
 やっぱりサコム



サンヨー電子式電算機
サコム
 SACOM

見やすい設計 IC-162型 280,000円
 平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
 16けた2メモリ高級品

SANYO 三洋電機株式会社

果汁入りのオレンジエード

大型のガラス六杯
 わずか七〇円

標準中味価格・瓶保証金300円別



Suntory
 Jade

定価 四百円 (送料・二十九円)